

山
ぎ
ら

第30号 平成11年11月
関東氷上郷友会



Communication Creator
コミュニケーション・クリエイター



ダイレクト コミュニケーション 宣言

ダイレクト・マーケティングを「生活者に最も近いところで展開するプロモーション活動」として捉えるなら、そのベースにはコミュニケーションの発想がなくてはなりません。商品売るだけでなく、生活者に心から満足していただくこと。一度限りのビジネスではなく、いつまでも末永くお付き合いいただける信頼を築くこと。DMSは、こうしたリレーションこそが最も重要という認識の上に立ち、『ダイレクト・コミュニケーション』を提唱しています。『ダイレクト・コミュニケーション』とは、マス・メディア、各種SPメディアでの情報発信により、ダイレクトにレスポンスがとれるツウウェイ型のコミュニケーション活動全般を指しています。多年にわたってデータベースに蓄積した情報と豊富なプロモーション・ノウハウをもとに、DMSは時代のニーズに即応したマーケティング戦略をご提案します。



株式会社 ディーエムエス

本社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-11 大阪支社 〒535-0031 大阪市旭区高殿7-15-8
DMS第二ビル/ウエアハウス/朝霞業務センター ●お問い合わせ:営業本部 TEL 03-3293-2970

山
ざ
ら
ら

第30号

佐
沼
川

山ざる 第30号 目次

〈表紙〉常岡幹彦画「錦秋白日」(30号・高源寺近在)

〈口絵写真〉①佐治川にかかる佐野橋(氷上町佐野)

②③佐治川と柏原川の合流点(氷上町稲継)

④かつて高瀬舟が往来した佐治川と左より白山及び篠ヶ峰(氷上町見田)

■撮影・徳田八郎衛

△ごあいさつ▽

あのことを思えば……渡邊隆男 5

平成10年度「郷友集いの会」……6 / 会計報告…… 11

祝寿の方々ご紹介…… 14

△ふるさと随想▽

古里讃歌……渡邊隆男 16 / 思い出の盆踊り……木村つた江 19

丹波の晩秋・写生日記……常岡幹彦 22

組曲「丹波」を舞踊化して……西崎 祥 25

思い出いろいろ……小竹政孝 27

石橋治郎八氏・略伝……宮野 近 29

疎開先のふるさと……徳義通夫 32

丹波を撮る……撮影・徳田八郎衛 34

△近況・エッセイ▽

ルネッサンスの街 フィレンツェを訪ねて……生田清弘 38

故郷を思わざるの記……小田武次郎 43

時間を計る……岩槻邦男 45

病を得てから……今田二三夫 47

私の趣味「ホームルームダンス」……大垣忠男 49

廃棄物の有効利用について……酒井重男 51

故郷丹波を原点に……足立東一郎 53

△わが師を語る▽ 山鳥鋭男先生……徳田八郎衛 55 / 坂本重雄 59 / 矢尾鐵太郎 61

△BOOKS▽……63

△丹波通信▽ 篠山市の合併を受けて……小田晋作 66

△ふるさとトピックスー丹波新聞からー▽……68

△ふるさとの祭り▽ 氷上町本郷「川裾祭」……徳田八郎衛 70 / 上嶋恵二郎 72

△ふるさとの民話と伝説▽ 雨を降らせた蟻の話……74

△インフォメーション▽ 展覧会……76 / 同好会……78 / 同窓会……79

協賛広告……81 / 編集後記……96



デカンシヨ節・替え歌

- 添うて嬉しい今年の秋は 二人そろうて茸狩りに（マツタケ）
- わたしや丹波の勝栗育ち 中に甘味も渋もある（クリ）
- 雪がチラチラ丹波の宿に 猪が飛び込む牡丹鍋（イノシシ）
- 主とわたしは丹波の切芋 すればする程味が出る（山の芋）
- 花はみよしの山富士の峰 豆は丹波の黒大豆（黒大豆）
- あれは立杭かまどの煙 焼いて渋味も色も出す（立杭焼）
- 味間茶の原緑にゆれる ゆれる緑が村の幸（茶）

「デカンシヨ節」にも、よく唄われる正調のほかに様々な歌詞がある。上記の替え歌は丹波の名産を織り込んだユーモラスして味わい深い歌詞である。

あのころを思えば

会長 渡邊隆男



皆さま、お元気ででしょうか。

「山ざる」30号をお届けします。誰も一年に一つ歳を重ねますが、この年輪の刻みがなぜ年々加速する思いです。今年もこの誌上で同郷の皆さま

まに親しくご挨拶できますことを、心から幸せに存じます。

景気が戻らないと皆悔やんでいますがお祭りさわぎみたいなあのバブル期の再来を待ち望むのは、もうやめましょう。あれは狂った世相、今が正常な時代なのです。人は勝手なもので、常に良い時だけを基準にするものです。栄枯盛衰は世の常とは申せ、今の日本はまだ枯れても衰えてもおりません。諸外国に比べれば極楽トンボ、ましてや昔のことを思えば、昨今の不況さわぎなどはウゴトかタワゴトのたぐい입니다。日本人もいつの間にか脆弱な人種になってしまいました。

私は昭和三年、後に昭和恐慌といわれた頃の生まれですが「水呑み百姓」という言葉がありました。手塩にかけて作っ

ごあいさつ

た米を年貢で召し上げられて百姓は水っ腹、ひえがゆ種粥をすすつたと申します。私の子供時代は朝粥とバラバラの麦めしで、白飯は盆と正月、祭りが法事にしかありつけなかったのです。

「赤貧洗うが如し」の言葉を実感しました。郷里の冬がなぜあんなに寒かったのか、思えば「着たきり雀」の超薄着で、肌を隙間風が吹き抜けていたのです。「爪に火をとます」という「始末」の合言葉がありました。「螢の光、窓の雪、文読む月日」とは、ランプを節約して螢や雪の明かりで読書したものだとか教わりました。薪を背に本を読む二宮金次郎の銅像が、どの小学校にもありました。命を国に預けた戦争時代はもっと苛酷でした。「自由」を考えることすら許されなかったのです。敗戦後、「人間は考える葦である」という言葉が流行しました。飢餓に耐えながらも、日本がこんなに恵まれていて、ほんとによいのだろうかと思え疑ったものです。

そして今や大半が戦争を知らない世代になりました。それはともかく、人それぞれの歴史があり、古里があります。どんな時代環境にあっても、母なる故郷は生きる支柱なのです。丹波の地金は超合金、郷友のさらなるご健闘を祈ります。

郷友の懇親会を十一月十四日(日)正午から、千代田区九段下の九段会館で開きます。年に一度のとても気さくな集いです。遠慮、気がね、引っ込み思案、そんなお里のくせはサリと捨てて、初めての方も今年こそぜひお越しください。

むすび合う「同郷の絆」

平成10年度「郷友集いの会」



平成十年度の「集いの会」は十一月十四日（土曜日）正午より、九段会館において催され、総会・祝寿会・懇親会がにぎにぎしく行われた。

総会は渡邊会長のあいさつで幕を開け、恒例の坂上理事の会務報告、谷口理事による会計報告、足立和巳監事から監査報告があり、いずれも満場一致の承認を得て、滞りなく閉会した。

祝寿会には、大正七年（一九一八年）生まれの足立昌彦様、小田武次郎様、高井静様、森田まさ子様をお招きしたが、いずれも都合悪くご出席がなかった。ますますのご健康とさらなるご長寿を祈念申し上げます。

懇親会では、柏原町議会議長にご来賓を代表してご祝辞を頂戴した。

乾杯の発声は、最高齢の足立順治さんをお願いした。明治三十五年生まれ、九十七歳の同氏は、ラクダ色のスーツに身を包んでさっそうと壇上に立ち、口調も若々しいあいさつと共に乾杯の音頭をとられた。

宴会のアトラクションは、おなじみのお楽しみ抽選会である。景品は会員有志から寄せられた品々が盛り沢山に用意され、郷友集いの会の名物になってしまった観がある。

午後三時三十分閉会。解散のあとは、当会館のティーラウンジや地下飲食街の店々に気の合う同志の語らいの輪がつく

られて、いつまでも解けずにいる風景もおなじみになってしまった。
(坂上勝朗・記)

●平成十年度 集いの会 出席者 (順不同・敬称略)

〈来賓〉

小倉 文夫 (柏原町議会議長)

福田 秀樹 (東京兵庫県事務所)

〈会員〉

○青垣町 (六名)

足立和巳 足立勲平 足立静雄 足立誠一 篠原よね子

安原三智子

○市島町 (十名)

芦田重秋 大槻作治郎 片岡クミ子 木村つた江 近藤勇

高見嘉都司 鶴田ゆき子 丸川宥次郎 浅倉成樹

渋谷要之助

○柏原町 (七名)

生田清弘 井本義一 岡林逸男 小田富士夫 坂本重雄

常岡幹彦 徳田八郎衛

○春日町 (六名)

上田脩 木呂子恵美子 佐々木盛雄 近藤田治 吉住重造

和田幹夫

○山南町 (九名)

池田忍 小田明子 梶原やす子 久保春雄 田中寛
千葉淳子 中居篤子 広内卓生 渡辺貴美子

○氷上町 (十六名)

足立順治 足立吉数 安達健一郎 上高子 上野重喜

小林和子 小山一美 坂上勝朗 田辺泰久 谷口捷

谷口浩章 藤原智徳 長尾貴美代 八木信行 渡辺隆男

余田知広

○西脇町 (多可郡を含む) (二名)

小糸イキ 大石佐代子

●お楽しみ抽選会景品寄贈者 (到着順・敬称略)

村上 末吉 ふる里おかき

荻野 武 インスタントカメラ

小田富士男 丹波黒豆菓子

近藤 勇夫 せんべい

木村つた江 クッキー

長谷川 尚 松茸昆布

水上高枝 高校特製味噌

岡林 逸男 紳士用折りたたみ傘

小林 和子 「果てる底なき」池井戸潤著

久保 良雄 新潟名産柿の種

藤田 玲子 狭山茶

一箱

一〇個

一〇袋

二箱

二〇缶

一〇箱

一〇袋

三本

五冊

五箱

五袋

足立	順治	鳩サブレ	五缶
細川	倫夫	鳩サブレ	六缶
高見	秀史	ワイン(ロバート・マンダビ)	五本
坂本	重雄	パーバリー・コットンシート	二点
常岡	幹彦	薄塩天然ダシ醤油	五箱
池田	忍	自分史年表	三冊
坂上	勝朗	かずのこ	五箱
堀井	隆川	文具一式	五個
岸本	勲	ミニ・ラリーカー	二個
		シャープペン	二五本
		タオルセット	二個
		メンズキット、ビジネスキット、	
		ハンドソープ	各一個
高見嘉都司		紳士用淑女用バッグ	各三個
足立 静雄		草加せんべい	二個
木呂子恵美子		大型ハンカチ	五枚
篠原よね子		アルファ米赤飯	二箱
足立 和巳		日高昆布	七束
		とろろ昆布	三袋
井本 義一		千疋屋クッキー	一箱
千葉 淳子		丹波大納言小豆	一〇袋
谷口 浩章		パンスト	一〇足

鶴田ゆき子	明治ミルクチョコレート	一〇〇枚
片岡クミ子	干しシイタケ	五袋
中居 篤子	千鳥屋のお菓子	一〇箱
足立 勲平	テレホンカード	一〇枚
足立 誠一	テレホンカード	一〇枚
上野 重喜	海外小品	三点
吉住 重造	ひらいたかこカレンダー	五部
渡邊 隆男	暮らしの毛筆百科	五冊
	トマトジュース	一打
徳田八郎衛	タオルセット	一組
	買いの袋	五枚
藤原 智徳	生シイタケ	一箱
岡 吉明	織田煮	三個
関東水上郷友会	丹波山芋2kg	五個
	丹波黒豆(平成10年産)	五個

●寄付者ご芳名

小倉 文夫(柏原町議会議長) 殿	二〇、〇〇〇円
福田 秀樹(兵庫県東京事務所) 殿	一〇、〇〇〇円
鶴田ゆき子殿	一〇、〇〇〇円
山本 清士殿	八、〇〇〇円
谷口 浩章殿	五、〇〇〇円

谷田 勝殿
 常岡 昭殿
 椿原 昭三殿
 平元富美子殿
 水船 隆昌殿
 柿木 妙子殿
 足立かをる殿
 上 高子殿
 萩野 秀夫殿
 坂上 豊殿
 坂本 徹二殿
 須原 逸郎殿
 波多 洋三殿
 広瀬 安伸殿
 三宅 良夫殿
 山口 和久殿
 池田 忍殿
 近藤 勇殿
 高見嘉都司殿
 常岡 幹彦殿
 和田 幹夫殿
 栗田 節子殿

五、〇〇〇円
 五、〇〇〇円
 五、〇〇〇円
 五、〇〇〇円
 五、〇〇〇円
 四、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 三、〇〇〇円
 二、〇〇〇円
 二、〇〇〇円
 二、〇〇〇円
 二、〇〇〇円
 二、〇〇〇円
 一、〇〇〇円

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりやを、この小誌は求めつつけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、「丹波のさずな」の強さを思います。

(山ざる編集部)

〔郷友の集い〕ご案内

同郷だから
だれとでも
気軽に語り合える
郷友の集い

ことしもぜひお出かけください。

- ◆とき 平成11年11月14日（日）
正午より
- ◆ところ 千代田区九段下・九段会館
- ◆会費 6000円（当日受付にてお支払い下さい）
- ◆問合せ 関東氷上郷友会事務局
（☎03-3293-2961・坂上）

会場では、恒例の各種景品が当たる「お楽しみ抽選会」を行います。会員の方々からの景品のご寄進をお願い致します。

坂本 重雄殿
豊島 幹雄殿
東田 実殿
松本 康子殿
村田 吉民殿

一、〇〇〇円
一、〇〇〇円
一、〇〇〇円
一、〇〇〇円
一、〇〇〇円

吉田 勇司殿
可部美智子殿

一、〇〇〇円
五〇〇円

会 計 報 告 書

(平成10年7月1日～平成11年6月30日)

関東水上郷友会
会計理事・谷口 浩章
鶴田ゆき子


(単位:円)


収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	1,296,893	郵便貯金 496,893円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出版費	1,218,500	『山ざる』29号
			通信・印刷費	177,800	総会・役員会案内等
年会費収入	456,000	延 209名	総会費	397,724	総会関係支払
総会費収入	339,000	57名	会議費	226,205	役員会等
役員会費収入	84,000	延 28名	慶弔費	50,580	祝い金・弔電
編集会費収入	30,000	10名	支払手数料	17,750	送金手数料 3,440円 振替手数料 14,310円
寄付金	129,500	延 34名	消耗・備品費	56,680	
広告料収入	865,000	延 74名	繰越金	1,055,768	郵便貯金 255,768円 定額貯金 800,000円
受取利息	614	郵便貯金 614円			
合計	3,201,007		合計	3,201,007	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成11年8月2日

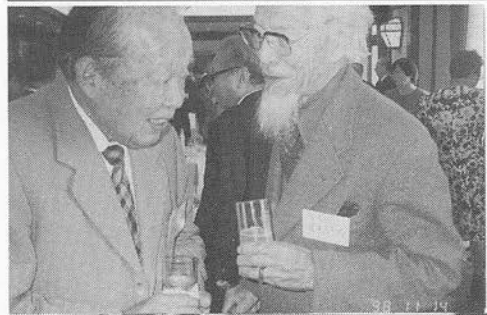
会計監査

足立和巳 

萩野武 



懇親会スナップ



祝寿の方々ご紹介

郷友会では、毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる六名の方々に、以下の項目につきアンケートを依頼しました。そのうち、五名の方から回答いただきましたのでご紹介します。

(五十音順)

〈アンケート項目〉

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

足立 勲平様

- ① 大正8年4月19日
- ② 水上郡青垣町
- ③ 昭和29年4月末日
- ④ 転勤
- ⑤ 昭和20年真夏、終戦の詔勅を聞いた時のこと。
- ⑥ 人生Tortial sum equal. 人間



「自分らしく生きる」こと。DNAと運命(宿縁)によって人生は定まる。思い思わなけれ。

久米 裕様

- ① 大正8年9月30日
- ② 出生地―埼玉県秩父郡皆野町大字国神576 父の勤めの都合
- ③ 昭和15年9月〜20年4月まで東京市内に勤務

④ 昭和16年4月 明大法科入学

19年3月 卒業

4月 明大法学部入学

20年3月 中退

⑤ 昭和8年1月降雪の中、佐治から中学まで自転車を通学途中、転んでサドルが折れ、学校まで3里の道を自転車を押して登校、遅刻したこと。

・ 中学時代2・5学年柔道部で県大会・全国大会に出場したこと。

・ 中学4年の修学旅行で阪神、四国、九州、中国の各地を見学したこと。

・ 昭和20年3月10日、東京大空襲を東京笹塚の自宅の防空壕の中から一部始終を目撃したこと。

10万人の死体を火葬にする煙を10日間も京橋の会社の屋上で見たこと。

⑥ 中学卒業(昭和12年3月)して10月に左側腎臓結核のため東大病院にて摘出手術したため兵役

祝寿の方々に紹介

は丁種不合格（昭和20年）で兵役には行けず、お陰で今尚80歳まで生き長らえていること。同級生100人中、今生きているのは20人位（昭和12年卒者）。

廣瀬すがの様

- ①大正8年12月13日
- ②氷上郡山南町
- ③昭和16年1月
- ④昭和16年 結婚上京
19年 疎開して丹波に帰る
21年3月 終戦後上京して
現在に至る
- ⑤終戦前2年有余、丹波の疎開先で過ごし、生まれ故郷が今は懐かしい思い出となりました。
- ⑥いつの間にか80歳になります。どうか健康で、歩きの会やら軽い運動も出来て人生幸せです。これからも迷惑をかけずに一日を大切に祈っています。

松下せつ子様

- ①大正8年5月29日
- ②氷上郡柏原町南多田
- ③昭和45年4月5日
- ④病気のため
- ⑤埼玉のほりがすごかったこと
- ⑥健康で長生き

村上 末吉様

- ①大正8年3月28日
- ②氷上郡大路村中山
- ③昭和23年7月6日
- ④恩師や友人が東京に多かった
- ⑤平成元年5月15日付官報において、通産、建設両大臣より商業



施設の企画等に関する知識及び技能の審査・証明事業認定規程を定める件として、社会的に認められたことである。当時(社)商業施設技術団体連合会の会長であつた私は、約20年にわたる苦闘が報われた日で忘れることはできない。

⑥80歳の馬齢を重ね考えることは多いですが、まず「寿命」ということです。遺伝子より人間の寿命は最大120歳だそうですが、まだ40歳あるということよりも、「生きていること」の尊さを知らされました。人は一生のうちに価値あることをして社会のために役立つことが大切と教えられてきましたが、自然（宇宙、神）は「生きていること」が最も大切であつて、欲望を満たすことではないということです。「生きていること」に喜びを感じることです。

ふるさと随想



古里讃歌（その4）

—— ふるさと遠くなりけり ——

渡邊 隆 男（氷上町）

十七歳、昭和二十年の四月に上京してはやくも五十四年が経ちました。思えば田舎に育った四倍あまりの歳月を東京に住みついたのでありますが、今もって東京は旅先のような気がしてなりません。「ちよつと丹波に帰ってくる」といいますが、「行つてくる」とはいわないし、いいたくもないのです。

私も年に一、二度は丹波に帰ります。帰らないとそのぶん遠ざかっていくような気がするのです。帰ってひとたび古里の“気”に浸ると、たちまち東京が“他所”^{よそ}になってしまいます。そしてなぜか東京へ“帰る”のがしんどいのです。

五十余年も経つと、古里の知人もめつきり減りました。そして私もまたいつの間にか“古稀”を過ぎてしまいました。

—— 古稀雑感 ——

○ 腰は曲がり杖つき歩める翁^{おきな}らを

「古稀」と呼びいし往時もありき

○七十路ななそじを哀あはみていしわれもまた

他人事ひとことのごと過ぎりけるかも

○七十路を越こせず逝よきにし友あまた

われも稀まなるのちとおもう

○七十路や老いの坂道ゆるけれど

先細りいて霧きりに消えゆく

○光陰は矢のごとしとぞ七十年

夢幻のごとく失せてはかなし

○古稀の祝いことわりてや、淋しかり

すなおになれとなぶる友あり

○今いまどきになが古稀よとコキおろし

石蹴いしけりとばしてよろけたりけり

○誉なめられし玉たまの飛距離トイを見るたびに

老いのけはいをひとりかみしむ

○憂世には琴・花・酒のあるものを

とどまりたまえ旅ぞ道づれ

○浮枕夢たどり来し七十路に

なお醒めやらぬこぞの舟唄

十二年前に父が八十九歳で他界し、昨年こぞの晩秋、母もまた九十四歳でこの世を去りました。二人とも生涯苦勞を重ねたわりには極めて長命でした。父の死は海外にあって見とれず

不孝を致しました。母の危篤を知ったのも旅先、ドイツのホテルでした。早々と仕事を切りあげて丹波に急ぎました。

——母立ちぬ——

○旅立ちはお前の来るまで待つと言う

母の御声おんこゑよ夢の枕まくらに

○ふるさとの山河いとしゃたらちねの

母待つ住処すまひかわれを育てし

○久びさの母の寝顔はやつれいて

風雪かぜゆきが襲ひた深くきざめり

○ひと月も前から臥ふしいて今はたゞ

子らの名呼びつ食もなしとう

○目を見据えて会社は順調かと問い給う

いつもの母は変わらわらずありき

○童唄わらべうたを口ずさみつ、拍子とる

母はむかしのそのま、なりき

○もういちど花を種子たねから育てたし

そが叶うかとわれに問う母

○百歳にあと三つあまりと指を折る

九十四の母の数え年かも

○よく聞いて達者に暮らせとひとりずつ
孫の手とりつ別れ惜しめり

○ 二十七人の子ら孫らに別れ告ぐる

氣丈な母の心根悲しも

○ ありがとうお世話になったとかさすむ声

返す言葉に詰まる子供ら

○ 唇の紅きをたゝえはげませば

うなづく母にみほとけの笑み

○ 嬉しいことを言つてくれると涙ぐむ

やさしうるわし母の去りゆく

○ 恐い顔になつていぬかと鏡覗く

そうなるものと聞きたいし真際

○ 今際とて夜の長きをくやみいる

母よいのちの燃えつくる日々

○ 来しかたに未練はないと言う母よ

あるいは今宵尽くるかいのち

○ 噎れつゝを命つきなむ母の眼の

うるめるふちに何想うらむ

○ もどかしく手を差しのぶる母あれど

われは離別に応じざりけり

○ 握る手のかよわき力におのゝきて

離せず離れず言の葉もなく

○ のど越さぬ食を求むるしぐさして

もう一日を永らうるらし

○ 一枚のタオル重きか指の所作

唇すこし動くとも見ゆ

○ あてどなく虚空まさぐる母の手は

何ぞ求めむ臨終の床

○ 息とだえまた戻り来てかそかなる

耳そば立て、いのち聞くなり

○ すべもなくたゞ見守りぬ臨終の

子らの願いは「一路平安」

○ 痛みなく苦もなく日々枯れつきて

眠るがごとき別離なりしか

○ 白骨の乾ける音を聞きし野辺に

溜息吐いて煙草ふかしぬ

○ たらちねの母なき部屋にたゞずめば

いずくともなく泣わさくる

○ 酒掬みて四方山ばなし尽きぬ通夜

一族郎党はしゃぐもありき

○ たらちねの絆ぞ永遠に結ばれぬ

写すがごとし母とわが性

古里の茜色の夕空に、そして宵の明星に向かつて「おかあ
ちやーん」と叫びたい、そんな幼な心が、この歳になつても
まだ、どこかにひそんでいて、うずいたようです。

父の死はもつとさわやかなものでした。子供の頃によく叱られたせいもあつたのでしようか、男同士のつきあいからなのでしようか。人の運命としてすなおに受けとめていました。でも母との別れは、なぜかいささかきついのがありました。孝をつくしていなかったからでしょうか、早くから里を離れてしまったせいでしょうか。ともあれ、半月近くもつきそつて臨終を見とることのできた幸せは、何にも代えがたいものがありました。

思い出の盆踊り

木村 つた江（市島町）

夏休みもあと数日となつたこの日、八月二十六日は、「二十六夜さん」と言つて神池寺で大がかりな盆踊りがある日です。小学校六年になつていた私は、盆踊りが大好きでその頃、あちこちの寺や学校の校庭で盛んに行われるのを、毎晩のように仲よしの友達と出かけていました。二十六夜さんが盆踊りの最後の夜だつたように記憶しています。

この日はあいにく夏蚕の繭取りで、私の家では、子供たち

里に帰つたときの母のあどけないあの喜びを、そして東京に発つときの母のあらわなあの涙を、もう見ることができなくなりました。さて、「上を向いて歩こう」です。「歳月は人を待たず」、感傷に浸つてばかりもおれませんまい。

○ 父母立ちてふるさと遠くなりけり

だれに告げよう修羅場のでがら

も動員され、朝から大忙しでした。私はこの様子では、夕方までに終わりそうもないと思い、母に

「私の分の割り当てを決めてほしいわ」

と言つて頼み、昼食もそこそこに夢中になつて割当て分をこなしたのです。三時過ぎになると、友達数人が誘いにきました。私は母にねだつて買つてもらつた花柄の新しい浴衣を着て、出かけようとなりました。兄はそんな私を見て、

「相変わらずちゃっかりしとる。お前はほんまに出べすけやなあ」

と半ば羨ましそうに言うのを背中に聞きながら、颯爽と出かけました。校庭の桜の樹蔭で校長先生と数人の男生徒が私たちを待つていて下さいました。

この頃の校長先生は、故吉見伝左衛門氏（故吉見文憲さんのお父上）でした。先生は鴨庄村の出身で、背が低く、太い眉毛が八の字型に下がっていました。誰いうとなく「小伝の八眉」という渾名がついていました。何時もニコニコ顔で優しい先生が私は大好きでした。先生は質素を旨とされ、自らも実践されていました。いつも小倉木綿の詰襟服を着ておられました。ある日、県視学さん（そう呼んでいた）が鴨庄小学校に視察に見えました。その時、校長先生が玄関に出迎えられたのです。

「吉見校長に用がある。君、取り次いでくれ給え」

「はい、私が校長の吉見伝左衛門でございます」

立派な口髻を生やされた県視学さんの顔は、困惑ととまどいのため、髯が震えていたそうだなど、後々までも学校中の笑いぐさになったのを覚えています。

その後、昭和五年には先生は村長になられ、同二十一年のGHQによる公職追放令があるまで四期の長きにわたり、村の発展のために身を粉にして尽くされ、「丹波の農聖」と讃えられました。現在は農協（鴨庄村）の敷地に公德碑が建てられています。

私たち一行は、校長先生の作詞・作曲による『村の四季』の歌（行進曲風）を合唱しながら、県道をそれ、村道に入り、

なだらかな坂道を登りつめた処が妙高山の麓です。ここで一行は一休みして汗を拭い、これから先のきつい山登りの心づもりをしました。妙高山は標高五百六十米余あり、氷上郡が一番高い山だと言われていました。この山の頂上に神池寺があるのです。一行は、幅一米足らずの道の両脇に雑木が被さるように繁り、昼間でもうす暗い石ころ道を黙々と登っていききました。山頂に近づくにつれ急勾配になっていて子供の足にはなかなかのきつい山登りでした。一時間余りで漸く頂上の広場にたどり着きました。

寺の広場には、櫓が組まれ、四方に張り巡らされた網に丸い提灯が下げられている様は鳳凰が羽を拡げているかのように見え、盆踊りの雰囲気尚いっそう盛り上げていました。

広場の傍の道の両側には、テント張りの露店がずらりと並び、ラムネやサイダー・ニッキ水（赤や青で色づけされ、ひょうたん型のガラス壺に入っている）など、又、ブリキや木の玩具などの店もありました。どこからかほうやき饅頭を焼く香ばしい匂いも漂ってきました。

「私は、寺の住職に会う用があるから、皆とはここで別れるけど、はぐれたら講堂に集まることにしよう。では、今夜は思いきり楽しんで下さいよ」

と校長先生は庫裏の方へと姿を消されました。先生と別れてからも、私たちは露店のあちこちを見て歩いていました。

と、後から私の肩をポンとたたいた人がいたので。

「君、塩谷君の妹さんやろ。きれいな浴衣着とるなあ。よう似おうとるで。いっしょに踊ろかいな」

その人は、兄の同級生で、村でも評判のハンサムな青年でした。私は密かに憧れていました。

あたりに夕闇が迫ってきた頃、やぐら太鼓の音が響き渡り、気持ち浮き浮きしてきました。間もなく櫓の廻りには、踊りの輪が出来はじめました。私は友達三人と並んで輪の中に入り、のど自慢の音頭取りさんの声に合わせて、ドッコイセー、ドッコイセー、トコドッコイ、ドッコイサノセのはやし言葉をかけながら踊っていました。かの青年は、私のすぐ横の輪の中で踊っていて、時折私に笑顔を向けて、一言二言話しかけるのです。私は小さく頷くのが精いっぱいでしたが、胸の中は嬉しさで大きく揺れていました。

私達は刻のたつのも忘れて踊り惚けていました。気がつくとき音頭取りさんの声が途絶えて、踊りの輪もいつの間にか小さくなり、人影も少なくなってきました。夜も大分更けてきたようです。誰言うもなく私たちは講堂に集まりました。先生はもう先に来ておられました。

この建物は木造の平家で、百畳敷の大広間があります。さすが、高い山の家です。蚊が一匹もないので、皆は思い思いの姿でごろ寝をしました。私が目を覚ました時には、東の

空が白ずんでいました。先生的一声で友達も起き出し、揃って山を下りることになりました。いつの間に来たのか彼も列の中に加わっていました。下りは面白いように早く麓まで着きました。校庭まで帰り着いた時、先生と彼は私達と別れることになりました。別れぎわに彼は「さいなら」と言い、私は下を向いて恥じらいながら、小さな声で「さいなら」と答えました。

その日から二年後に、私は上京しましたので、初恋は夏の夜の線香花火のように消えてしまったのでした。

福知山音頭

福知山出て長田野おさだの越えて駒を早めて亀山へ

ドッコイセー ドッコイセー トコドッコイ ドッコイサノセ
福知山さん葵のご紋いかな大名もかなやせぬ

ドッコイセー……

蝶よ花よで育てた娘今は若い衆の敷布団

ドッコイセー……

四角四面の豆腐屋の娘色は白ても水臭い

ドッコイセー……

踊りゃ下手でもやりくりや上手今日も七つや(質や)では
められた

ドッコイセー……

丹波の晩秋・写生日記

常岡 幹彦（柏原町）

昨年初夏の頃、丹波新聞社から今春の同社新社屋の竣工を記念して個展を、とのお話があった。丹波に帰るたびに描いた写生も大分あったので、お引き受けすることにしました。秋の写生をもう少し描きたくなり昨秋おそく、氷上郡内で久しく訪ねることのなかった所を中心に、描きながら歩いた。ふる里の山々に包まれた数日は、私の心身をまたリフレッシュさせてくれた。

〈某日〉柏原の八幡山はやはり欠かせない。私の好む八幡山は、冬さつと降った雪の朝と、秋である。

今回はY社の屋上をお借りして写生した。いつものことながら、こんもり繁った森の中の朱の塔は懐かしいが、最近だんだん下の方まで見えてきているのが、気になる。

山南町の上久下橋から見る篠山川は、いつ来ても静かだ。深い川面の色が天候や時間によって、微妙に変化する。

また風によって流れの光り具合が形を変えるのも面白い。そして何よりも兩岸の紅、黄葉が美しく、心を川の奥へ、奥

へと誘ってくれるのがうれしい。

一昨々年、スイスの旅をした時は、とてつもない大きな空間と峻厳な山を眺めて一か月半過ごしたが、帰国後ふる里に帰って目に映った丹波の山々は、今までに感じたことのないくらい、たおやかな、やさしい姿だった。

三越本店での個展制作で、一昨年、昨年とスイスの山ばかりに取り組んできたが、丹波の山を描くのは久しぶりである。今の私の作画姿勢が、どんな丹波を描かせるのか。……私にも描いて見ないとわからない。

〈某日〉青垣町のAさんより東芦田にかやぶき屋根が残っていると聞いて出かける。家の風格と云い、山を背負った周囲の樹の配置、色の変化と云い申し分ない。今回の制作期間にはとても間に合わないとは思ったが、これを見過ごす手はなく、早速矢立を取り出した。

写生を始めると、車を出してくれたKさんがそつと離れてゆく。終わる頃を見はからって、また現れるのだ。奈良、山陰、広島と随分お世話になったが、一人でぼつんと仕事するのは好む私の気持ちを感じてもらったこと。いつもありがたいと思う。

午後、本郷（氷上町）に向かう。新しい本郷橋の上から佐治川を描く。遠山と川をはさむ木々との間は霞み、曲がりく



かやぶき屋根の家（青垣町）

ねった佐治川の流れが弱まりゆく陽光に鈍く沈み、遠く橋の下の川面の明るさが奥行きを見せる。

夕方までまだ少しあったので、母坪（柏原町）の妙見山へ。坂道をやっと登り、さてと周囲を見回したが、何も見えない。昭和五十四年頃には確かに写生したはずだが、木が育ったせいでらう。

少し下がると木々の間から俯瞰（ふかん）することが出来たが、昔はほとんど田んぼだったのが、今は大小の建物でぎっしり。あきらめて、ただ夕闇の迫る中にとけ込む紅葉をゆっくり眺めていた。

〈某日〉丹波に帰るといつも車を出して頂くK氏にお願いして、青垣の佐地神社と高源寺に向かう。この秋は紅葉が遅く、色づき始めたばかり。まだ青々した所もある。

絵描きは木のウソつきで、より実感を表すために構図上、勝手に木を移植したり、形を変えたりするのだが、いくら何でも青い葉を赤くするようなウソはつけない。

デッサンはしたものの、これでは着色は無理。「こりゃあかんわ」。K氏も「あさまへんな」。間において十日後にも丹波に帰るので、その時まで彩色はあきらめ、葛野（水上町）の達身寺に向かう。

今日は時雨（しぐ）れたと思うと、青空がのぞくような天

気だが、それだけに山々が見え隠れして面白い。風景がしつとりとして、私の最も好む自然の表情だ。

達身寺は二十年ぶりくらいだろうか。どこを走っても道も橋も良くなり、家々も新しくなって、わら屋根は無論、昔の丹波のたたずまいは少なくなつた。

達身寺に着くと、以前の想いがよみがえつてきた。少し遠目に眺めると、後ろの山の木々も秋の緑で達身寺独特のかやぶき屋根と白い塀が印象的だ。幸い雨も上がって、ゆつくり写生することが出来た。

写生が終わるとまた怪しい雲ゆきになり、香良（水上町）の岩滝寺では結構な雨に。それでも、若い頃は旅に出ても晴れていないと気分が面白くなかつたが、最近は霧よし、雨よし、雪もよし、と応じるくらい余裕はできている。

岩滝寺の山門に向かって登る石段は、昭和四十八年に一度写生している。両側の杉がもつとうっそうとしていて、鐘樓の門をくぐると紅葉が明るく迎えてくれた。そんな記憶があったので、今回は参道は省略して奥の「独鈷（どっこ）の滝」への石段を登る。

二十五年前に初めてこの滝と出会つた時、しーんとした空気に包まれて全く変化なく流れ落ちるリズムにまる一日浸つていると、言いようのない不思議さを感じ、気が遠くなりそうになつたのを思い出した。

滝の水量は当時と変わっていないが、夕方のせいとか、より厳しく深く心に迫り、意識的に荒々しく、一気に仕上げる。雨中で描いた和紙の画面はベタベタに。

夕刻しんと冷え込む頃、帰路に。「石が濡れているから気をつけて」と言つたとたん、Kさんが派手に尻もち。何ともなくてほつとしたが、石段と雪道だけは細心の注意が必要だ。

〔某日〕先日果たせなかつた青垣町の佐地神社と高源寺の彩色に。途中、車の流れがおかしいと思つていたが、高源寺に着いて驚いた。

今まで何十回と通つたが、こんな高源寺は初めてだ。昔、ほの暗い自然石の石段を静かに登つて中門を抜け、最後の急な石段に達した、あの静肅さは失われていた。人出の多さのせいばかりではないようだ。

水上勉が「丹波」という雑誌に、高源寺を訪れた時の印象を「丹波の山奥にかくれたもみじ寺は、辛うじて日本が抱いている、東洋という思いがした」と書いている。

文化遺産の問題を考えさせられる。（平成10年12月・記）

〔編集部注〕本稿は、平成11年元旦号の丹波新聞紙上に掲載されたものを転載（挿絵とも）させていただきました。

組曲「丹波」を舞踊化して

西 崎 祥（柏原町）

母のいる故里で踊りたい！ そんな気持ちで丹波通いが始まったのは丁度平成に年号が変わった時でした。主人が定年になり子供も巣立ち、やっと願望を叶えられる時が来て、先ず思ったのは七十歳を過ぎ、たった一人で暮らしている母と共通の時間を過ごしたい、そして今まで学んできた日本舞踊を通して丹波の人と交流したいと願ったことでした。

先ず平成二年に初めての「ふるさと舞踊公演」を開催し、以来十年間で六回を数え、隔年ごとに勉強会も続けました。地域の行事や催しに参加するうちに踊り好きの仲間も増え、観客も年々増加していきました。公演会場の「丹波の森公苑」では、観客動員でも最高を記録するようになりました。

母も大変喜んでくれておりましたが、八十歳を過ぎた頃から体調を崩し、入退院をくり返すようになったため、稽古のあい間には病院通いという日々となりました。その母も昨年五月に亡くなり、そのうえ私自身が十年來患っていた股関節の変形が限界にきたため、思い切って手術を受けることになりました。入院した私はベッドで毎日般若心経三巻を唱え、

母の冥福と足の回復を祈っておりました。

入院の時、私には密かに期するものがありました。もし手術が成功し、再び公演が出来るなら是非実現したい創作舞踊のことでした。テーマは、今から二十年程前に丹波の混成合唱団パストラールが春日町在住の船越昌氏の作詞、柏原高校の音楽担当内田修二氏の作曲によりレコード化した組曲「丹波」という作品でした。当時そのレコードを母から貰い、いつか丹波で舞踊化したいと心の中で温めていたことを思い出したのです。入院中、何度も何度も聴くうちにいろんなイメージが浮かび、あれこれ構想を練って楽しんでおりました。この十年間一月も休まず通った丹波の自然と人の情けを、身をもって肌で感じ、染み込んだ丹波の空気がおのずと振付けに現われるようになりました。

全五景の構成と作品全体のイメージを決めるのは大変苦労でしたが、好きなことは苦にならず乗り切れるもので、四か月の稽古期間はすっかり丹波一色でした。何とか良いものにして母への追善にしたい、それに丹波西崎会十周年記念公演である以上、本来の伝統ある日本舞踊の方も決して手を抜かず本格的なものを観せなければならぬと必死に取り組みました。生徒達も一致団結して稽古に時間をとってくれたり、衣裳、小道具は手作り、装置も頼もしい協力者の助けを借り、照明、音響はホールの専属の方に無理な注文をお願いしまし



た。また演出面では、振り以上に何を表現したいかを重視し、気持の持ち方、曲想を説明してかなり厳しく丹波の心を踊りたいと望みました。以下その内容を略記しますと、

〈第一景 命のみなもと〉丹波の地に降りしずむ雨音は、人々の命を育む愛の旋律。雨水はその源を双分けにして、日本海へ注ぐ由良川と瀬戸の海へ注ぐ加古川を形成し人々の連帯の心を養いながら二つの川の流れは永遠の抒情の調べを奏でる。ここはさわやかな青春のイメージで。

〈第二景 祖先の足音〉歴史の事象を現実にとぐり寄せて謳い上げる八上城と黒井城の興亡の歴史は丹波の戦国乱世の集約であり、現代を諷刺し、未来を予言する我々身辺に迫りつつある足音であり、丹波の未来に向かつての祈りであろう。力強い男の汗と涙の燃えるような思いを夏のイメージで。

〈第三景 秋の抒情〉豊かな自然に恵まれた感謝と収穫の喜びを。

〈第四景 伝統のこころ〉今も丹波布を織り続ける丹波の女の心と黙々と働きながら丹波の伝統と文化を重く担い続けている丹波焼は、丹波のすべての男たちの魂の姿であろう。この心意気を紬をきた女のソロで。

〈第五景 希望〉丹波の人々の感情の起伏をもつともクールに象徴している雲は、恵みの雨をもたらし万物の命が蘇生

し人々に希望がふくらむ。かくて深い霧のしじまから新しい幻想曲が湧き上がり、働く人々の力強い歌声は丹波の田園に展ひらがるといふ作者の言葉を賛歌する内容を二十八名の出演で上演した。

思い出いろいろ

小 竹 政 孝 (柏原町)

千昌夫の「味噌汁の歌」に、「故郷を出て十六年……」という一節があるが、私が進学のために丹波柏原を出たのはもう三十六年も前のことになる。生をうけてから高校卒業までの十八年間は丹波、続く九年間が神戸・西宮、そして最後の（と言うのはおかしいが）二十七年間が横浜・鎌倉で今日に至っている。

ここまで書いて気が付いたが、半生の二分の一を故郷で過ごし、また、関西と関東で半生の二分の一ずつを過ごしたことになる。いつの間にか年月が飛び去り、これからは関東の暮らしのほう年々長くなって行くことになる。

我が家は私、家内、長男、長女の四人家族である。子供二

お陰様で作詞・作曲の両先生も終演後、楽屋までお越し下さって喜んで下さり、八百人を超す観客からも惜しみない拍手をいただいたことで私も両親の供養が少しは出来たかなと思っている次第です。

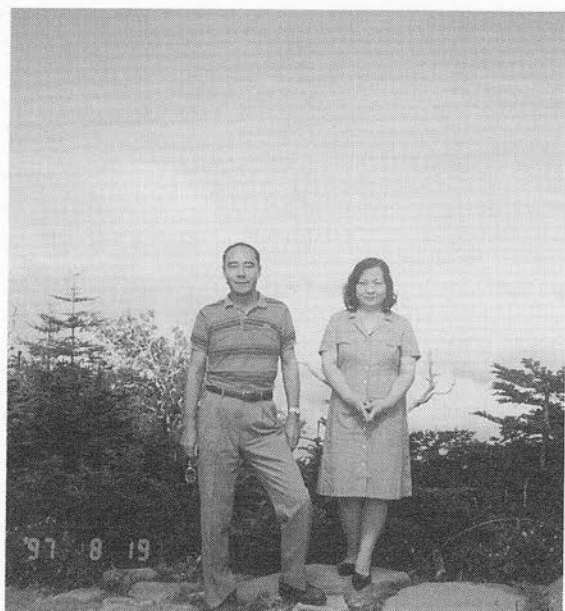
人は成人して既に数年が経つ。家内（旧姓藤原房子）は水上町三方の産で私とは高校が同じであるが、高校時代には知らなかった。私だけが「彼女を知らなかった」と言う不公平になる。彼女（本人曰く、「テニス部の藤原」）こそ私のことの丹波産の二人が故郷を遠く離れた鎌倉（由比ガ浜）の地で元気に過ごしているのも不思議なことではある。

年齢もあつてか、近頃は故郷丹波、子供時代の友達の顔、様々なことどもがしばしばやけに懐かしく思い起こされる。

柏原には「かんししょう」（空襲に備えた監視哨の意であろう）と言う小高くてすこぶる見晴らしの良い山があつて、しょっちゅう登つたものだ。小学校の一年か二年の頃、春先にその山でチャンバラごっこにもつてこいの真つ直ぐに伸びた枝の無い若木を見つけ、大喜びで皮を剥き刀をこしらえ、チャンチャンバラバラとやったものだ。さあ、その翌日から大変、大変、全身に湿疹ができ、男の大事な物までパンパ

ンに腫れ上がった。漆の若木だったのである。それ以来成人するまで漆は大の苦手となり、漆の側を歩いただけでも発疹が出来そうであった。

幼稚園の時、隊を組んで小学一年生と喧嘩をして勝ったこと、図画の時間に裁判所の塀に登って写生はそっちのサクラノボを採ったこと。習字の時間に習字が嫌で先生と教室内を追いかけてこしたこと。授業中に隣の女子の手を握って



いて先生に「何をしとる！」と（羨ましそうに？）一喝されたこと。福知山線の線路にヘビや一円玉を置きどうなるかを試みた実験。春、レンゲの花で首飾りを作ったこと。夏、昼寝を抜け出しやけどをするような太陽の下で鮒を釣ったこと。秋、氏神さんのお祭りで新聞紙に包んでもらったゆでたての枝豆。冬、寒さ冷たさにしびれながらも心騒いだ厄神さんの祭り。病弱なお袋を思い一生懸命に農作業を手伝い続けた十数年（幼い子が担いではいけない重い物を気張って担いだことは、後々腰痛持ちの原因となって今日に至るまで身中から私をさいなんでいる）。就職を決める時「男児たるもの、どこに行ったっていいよ。東京でも海外でも……」と言った親爺、お袋のふと淋しげな顔、などなど、走馬灯の如く次から次へと懐かしいことが浮かんでくる。

私の親は両親共とつくに亡くなり、生家も今はないが、有難いことに家内の実家という拠り所が残っており、お蔭でこれからも丹波に行く機会に恵まれるであろう。関東に居て何百回と繰り返し返してきたやりとりには次のような二つがある。

その一、「ご出身はどこですか?」、「丹波です。丹波と言っても篠山ではなくて、カシワバラと書いてカイバラと読む丹波柏原です。」「京都ですか?」、「いいえ兵庫です。兵庫県のど真ん中やや東寄りの小さな盆地です。」「?」、「丹波は今の京都と兵庫にまたがっています」「ああそうだったですか。

でもいい所ですわねー」

その二、酒席などでふざけて、「小竹さんは丹波の山猿ですかー?」「そう丹波ですよー、都の文化の香りがする京都文化圏の出です。蝦夷の住んでいた関東とは違いますよー」(失礼、これではどこかの大会社の社長さんと同じで大失言になります。本心ではありません)

石橋 治郎八氏・略伝

宮野 近 (柏原町)

石橋治郎八(春日) 明治二十一年生。昭和三年(株)石橋商店設立。その後、石橋生絲(株)、石橋沼津製糸(株)、石橋絹業(株)の各社長。その間、横浜生糸取引所理事長、日本絹業協会国内宣伝委員長、沼津商工会議所会頭、沼津観光協会会長、日本経営者団体連盟常任理事、大日本蚕糸会理事、日本製糸協会理事、(財)神津牧場理事長等を歴任。関東水上郷友会会長を十八年間勤める。関東水上郷友会の中興の祖。『山ざる』誌の生みの親。同誌表題揮毫者。シルク紳士。丹波の名士。昭和四十六年八十三歳で逝去。

さて、眼の前に迫った二十一世紀は、経済成長、エネルギーの確保、地球環境の保全、これら三つを同時に達成せねばならない難問(トリレンマ)を抱えた世紀である。このような時代にあつて丹波の山々、田畑、空気はますますその存在価値を高める。大事にしたい。しばしば訪れ、自然相手にいたわりっこをしたいものである。

石橋治郎八氏は、明治二十一年、父作太郎、母あいの長男として春日で出生。「坊ちゃんガキ大将」を経て、生糸業界に入る。初任給八円也神戸で修業。組合製糸や相場予測のことなど勉強中、関東大震災。蚕繭処理法で初取引。「捨てたものは拾いもの」の哲理を知る。「合成樹脂」「挽頭祝言」のことなどあり。「国破れても、芸術は残す」の心情。氏は、秩父宮家とのご縁浅からず。準皇族的な交わりをされた人である。また、沼津市の発展に寄与された。

今日、関東水上郷友会があるのは、実に石橋治郎八氏のおかげである。我々は、そこに想いをいたさざるべからず。生糸に生涯を捧げられ、郷里丹波の開発・繁栄を終生念願され、郷里に数々の事業を起こし、福祉の増進に寄与された功績は大である。

「わしは大隈さんじゃないが、一二五歳まで生きるよ」と

言われたほどに健康に自信あり。我国生糸業界の困難を背負い、東奔西走の激務に耐えながら、郷友会のため二十年近く熱心に指導された功績は誠に大である。氏の最も心残りと思われていたのは、丹波地区の経済開発と、多紀・氷上の各郷友会の大同団結の問題であった。

以上、関東氷上郷友会の中興の祖「石橋治郎八略伝」の一端を披露しました。次に、氏の『処世哲学』を紹介します。

私は今年（昭和三十七年）で満七十四歳を迎えた。明治、大正、昭和の三代にわたる私の人生コースは、近代日本の社会的発展の経路がそうであったように、決して坦々たる道程ではなかった。

没落した家の再興という、少年時の双肩に負わされた重い責任、他人の飯を食いながら鍛えられた生糸という事業の体験、そして三十五年前に独立して以来の相場の波乱との日も夜もない格闘。その過程の中で、私が一步一步と歩みながら体得してきた哲理は、人生は運と根と勘だということである。運はただ受身に流されるのではなく、チャンスを見定めて自分から掴まなくてはならぬ。根とはむろん、根性である。そしてその根性の先端に、動物の触觉のように働く鋭敏な勘がなくは、波は乗り切れない。これらのものを体得する基礎が、ひと口にいうと「人生の苦勞」というものなのだ。苦

勞を厭うてはいけな、ということを特に私は今の若い人達に言いたい。（中略）

一人人間というものは、生まれた時は裸一貫、そしてこの世を去る時もそのままの姿で行くより仕様がな。だから、生きている間といえども、全く自分のものだといものは一つもない。身体と心だけが自分のものといえれば自分のものであるにすぎない。

この考えでいけば儲けた金は他人様から預かったものだし、損した分は他人様に預けたようなものだと思えることができる。自分のものは肉体と精神のほかにはない——私はいつもそう思っているのである。

私のことをよくこう言う人がいる。

「石橋は相場で損をしたことがない。相場の上げ下げとも、いつも儲ける立場にいる」

神様じゃあるまいし、誰がそんなことができるものか。ただ樂觀、悲觀の色が顔に出ないだけのことである。私の顔もそういう具合にできているらしいけれども、何より考え方の根本に「生糸人間は無一物なんだ」という理念があるからなのである。そうでなければ、いかにツイテいても、いかに強靱でも、この歳になるまで半世紀の間、浮沈の激しい生糸の世界に生き抜いてこられるはずがない。

左様、私はこの「無」という字が大変好きである。偉い人

に何か揮毫してもらうような時には、大てい「無」か、あるいは「無一物」という字を書いてもらうことにしている。

『無は無一物なり 無一物は即ち無尽蔵なり』

これが、私の生活体験から自然に生まれてきた、只一つの座右の銘とすることができる。先年、これと同じことが仏教のお経の文の中にあることを人から聞いて知った。長い間かかってたどりついた心境が、経文の中の教えに一致していると知って、私はいよいよ自己の信念を深めたことであつた。

だが、健全な精神は健全な肉体に宿るといふ諺もある。健康な身体を保つためにも、私は始終努力をしている。私が自分で思いついた健康法の一つに、朝晩かならず指や手足を強く引っぱってもらふという方法がある。これは大変効果があるようだ。ことに年をとるとどうしても身体がこわばるから、この方法を励むと手足がやわらかくなり、血の循環がよくなるわけである。これも、ある人に話したら、すでに前例がある。インドのヨガの修業がこれだという。自然に考えていた私の健康が偶然にも今注目をあびているヨガの療法に一致していたのである。

そうして相場の波だけでなく、人の噂などにも気かけない精神が必要なのだ。私のことを業界の人たちは、大久保彦左の異名で呼んだりしているが、人が何を言おうと我が道をゆく彦左衛門の精神は、まことに健康のお手本といつていい。

精神と健康について、私の身近かな話を一つつけ加えよう。戦争中に失つた婿養子の久澄の兄、沢潟久敬君は京都大学で哲学を専攻し、現在大阪大学の医学部教授であるが、彼に向つてある時私が、体験から割出した持論を持ち出してみた。「これからの医学には哲学が必要じゃないかね。病気はまず精神から治さなくてはならぬと思うが、どういふものだね」すると久敬君は

「あなたはえらいことを言いますね。そういうことが今アメリカやソ連の医学界では注目されているのですよ」

と云つて、私の説を認めてくれた。二年程前、久敬君が出した「医学大観」といふ書物には、このことが学問的に裏付けを加えて解説されている。

学問のことは私の喋々すべきところではないが、久敬君の話をきいても、真理は平凡のうちにあるという私の信念はいよいよ強まった。「大慾は無慾なり」といふような格言もそうだが、東洋の哲理は単純で平凡のうちに無限の真理を潜めている、と私は思う。西欧の複雑な科学的思想と、われわれ東洋人が持つて一見平凡な思想とは全く同格の、真理に通ずる哲理から出ているのだと思うのである。

「無」を生涯の境地として、精神と肉体の相伴う健康に恵まれて生きることこそ、人間の至福といつてよいであらう。

(石橋治郎八著『シルク紳士まかり通る』より)

疎開先のふるさと



徳 義 通 夫 (春日町)

啄木は上野駅でふるさとの言葉を懐かしんだ。

多くの人が、帰郷の度に少年時代の楽しい思い出がよみがえるといふ。

私は昭和十九年一月、二歳上の姉と、父のふるさと春日部村多田に疎開した。国民学校一年生の三学期だった。

その家には祖父母をはじめ、まだ結婚していない父の妹たち、祖母の妹家族、十数人が生活していた。田舎の家のことでもあり、この大人数を十分に収容出来る余裕はあった。しかし大農家でなかったため、大人数を満足させるだけの食料は不足がちだった。

育ち盛りをひもじさに耐えて育ったせいかわ、今もその反動で早飯の大飯ぐらいになってしまった。

村の学校の授業は、私が習ってきたところよりもはるかに遅れていた。ご多分にもれず疎開者はいじめられたが、学校を休むことはなかった。

父は様子を見て帰って来たが、飢えた少年は懐かしさよりも食べ物の土産を期待していた。

最近、皇后陛下が群馬県へ疎開されていた時期、お父様は美智子様のためにいつも本を持って疎開先に来られたという。そのことがその後の自分の人生に大きく影響したと語っておられた。正田家と徳義家の家柄の差か、親子の関係の深さの違いか、いずれにしても教養の違いを感じずにはいられなかった。

都会育ちの私にとって、百姓仕事はつらいものだった。

田植えどきの苗代の「めいらん」(苗の害虫)取り、蛭は身の毛もよだつ恐ろしさだったが、地元の子供たちは足に吸い付いても平気で仕事を続けていた。

学校から帰ると「こくば」(枯れおちた松葉)かきが日課となっていた。子供といえども労働力として扱われ、この「こくば」は貴重な燃料となっていたのでサボることは許されなかった。

私は現在でもそうだが、手足が荒れ性だったので、手はあかざれ、足はしもやけでパンパンに腫れていた。

ひもじさと仕事のきつさに耐えた少年時代だった。

今小学校二年生の孫を見る時、この子と同じ年頃だった戦争が異常な心理状態に追いやられ、甘えが許されない時代だった。

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られています。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。なお、編集上以下のように分類しております。

- ①ふるさと随想 ▶ ふるさとに関するさまざまな思い出や感想など
- ②近況・エッセイ ▶ 旅行や趣味／世相雑感／私の近況／文芸
- ③インフォメーション ▶ 展覧会／各種催し／同窓会／本の紹介
- ④こんなテーマの原稿も募集しています。
 - ▶ ふるさと研究／ふるさとの祭り／ふるさとの民話と伝説
 - ▶ わが師を語る／わが出発の時（ふるさとを離れる時）
 - ▶ 丹波を撮る（帰郷の際に撮ったスナップ・ふるさとでの思い出の写真）

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成12年8月20日です。

原稿枚数：400字詰用紙4～5枚程度

送付先：〒104-0044 東京都中央区

明石町2-16-206

(株)ホンゴ出版内

『山ざる』編集部

TEL 03-3248-6625

FAX 03-3248-6626

翌年の夏戦争は終わった。やつとここから脱出できると喜んだが、父の仕事の関係で結局高校まで丹波を出られなかった。

私も還暦を迎えた。「定年帰農」なる用語まで生まれ、田舎で百姓でもしながらのんびりと過ごす。また脱サラして農業でもと、テレビで語る彼らの百姓仕事はいかにも楽しそうに報道されている。

冠婚葬祭でたまに帰郷するが、同年配の村の人たちは、日焼けした顔に手指は節くれだち、いかにも老けている。農業

は機械化されたとはいえ、本当の百姓がいかに重労働であるかがわかる。脱サラ農業でない厳しさがある。

私にとってふるさととはさむざむとした、悲しい思い出しかない。



◆ふるさと点景◆

小鮎釣りしかの川も：
(柏原町大新屋にて)



日当たり悪い、山が邪魔？ (柏原町母坪にて)



廃屋 (氷上町稲継にて)

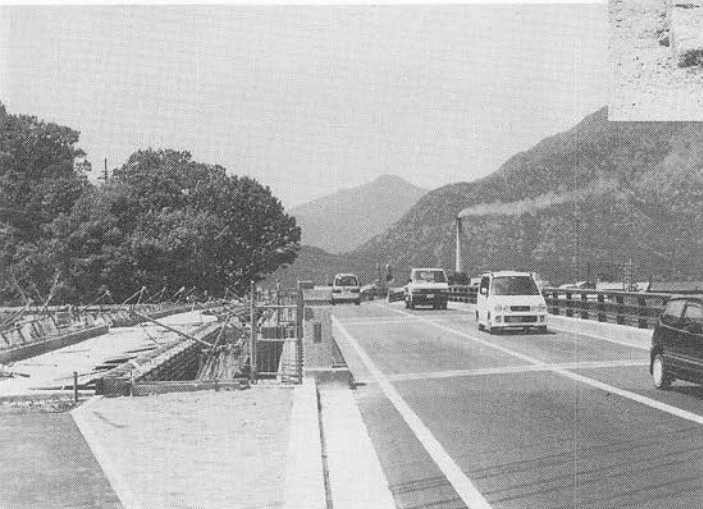
◆丹波を撮る◆



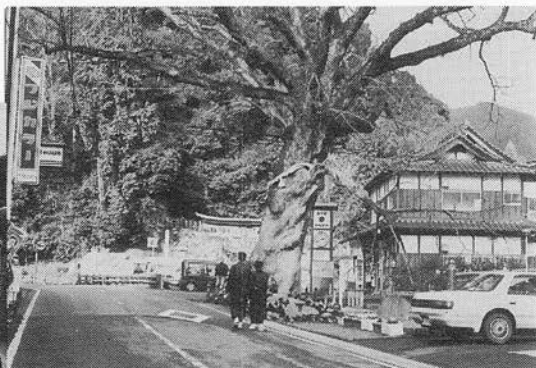
かつて水運で栄えた水上交通ターミナル
(氷上町本郷にて)



国道175号線柏原川橋梁
にやっと歩道橋が
左側が母坪（稲継）城跡
(氷上町稲継にて)



少し
さびしいお正月風景



柏原町・木の根橋にて

柏原町・八幡神社にて



新開業の温泉は早朝から営業

さびしい柏原駅頭

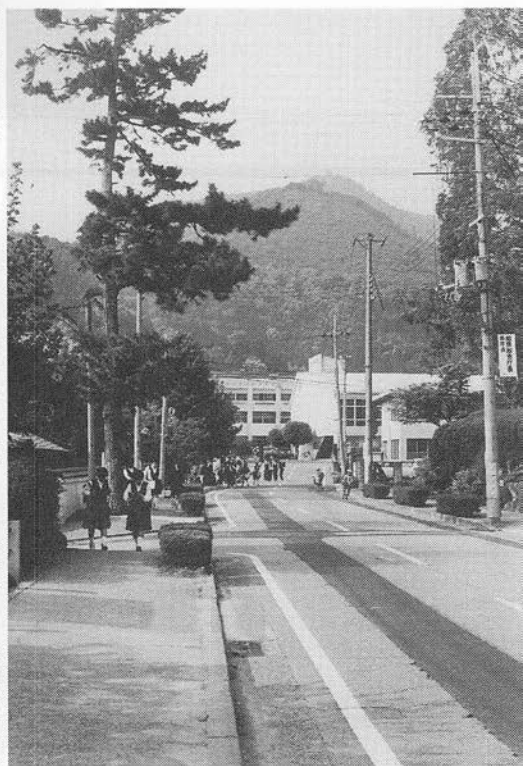


柏原-佐治間に登場したマイクロバス、
昔のようなお飾りはない



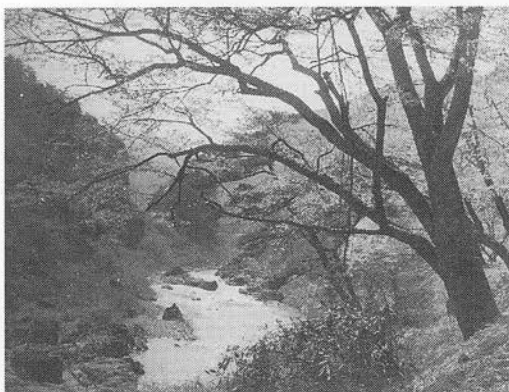
◆丹波を撮る◆

樹医の治療を受ける木の根橋・大けやき



「大手会館（柏原町屋敷）」明治18年、氷上郡各町村組合立高等小学校校舎として建設、同30年、郡立柏原病院に、同41年郡立柏原高女校舎を経て現在は地域福祉活動の本部となっている。写真左は大手会館から見た柏原高校正門。

近況・エッセイ



ルネッサンスの街

フィレンツェを訪ねて

生田 清弘（柏原町）

イタリヤ、トスカーナ平野の中心に位置する州都フィレンツェは私の最も訪ねてみたい都市の一つだった。それはルネッサンスを主導し、建築、彫刻、絵画などの各方面にわたり美術史に燦然と輝く名を止めた幾多の芸術家を輩出し、アルノ川の川辺に展開するウフィツィ美術館、ドゥオモをはじめ街全体が美術館といわれる程の見応えある遺産を残した町であるからだ。

ウフィツィ美術館は、メディチ家が収集した美術品を陳列した世界有数の美術館の一つで、一五六〇年、メディチ家のコジモ一世の命をうけた建築家ヴァザーリはヴェッキオ宮殿の手狭を解消するため、シニョーリア広場からアルノ川の方向に長く延びる二列のガレリア（画廊）を奥でつないだコの字型の建物をつくり面積の拡大をはかった。建物自体、オフィスの集合体であったためウフィツィ（uffizi: 英語のオフィスの意）と呼ばれた。後年、メディチ家のコレクション

ンはフィレンツェ市に寄贈され、ここに集め美術館として一般に公開されるようになった。フィレンツェ派をはじめ、シエナ派、ヴェネツィア派、オランダ、ドイツ、フランスなどの名画が収蔵されている。

ボッティチェルリの代表作といわれる「プリマヴェーラ（春）」は神話を絵画化した作品で「ヴィーナスの治国」とも呼ばれ、春の花園にヴィーナスを中心に九人の人物が華麗に描かれ何かを物語っている。この作品とともに、もう一つボッティチェルリの代表傑作といふべきものに有名な「ヴィーナスの誕生」がある。これらの作品は全く対照的に、前者のヴィーナスが華麗に装っているのに対し、後者は衣服を身につけず裸身の女神である。一説によると、

「愛」に地上的な愛と天上的な愛があるとして、それらを象徴する「双子のヴィーナス」として、物質的な衣装に身を包んでいるのが「地上のヴィーナス」（俗愛）で、裸身の方が「天上のヴィーナス」（聖愛）と考えられている。（フィレンツェ美術散歩」とんぼの本より）

ボッティチェルリの「東方三博士の礼拝」は、宗教的テーマの作品でサンタマリア・ノヴェッラ教会のために制作され、年代的には「プリマヴェーラ」と重なり一四七五年頃とされている。

ボッティチェルリと同時期に活躍した芸術家にレオナルド・

ダ・ヴィンチがいる。この美術館には彼の若い頃の作品三点が所蔵され、そのうちの一つに「受胎告知」がある。ここに描かれたマリアは堂々と胸を張り、毅然とした態度で告知を受けている。この絵の特徴は遠近法がとり入れられ、マリアと天使の描かれた前景、糸杉のある中景、それにぼかし画法による遠景と実に巧みに構成されている。

「受胎告知」といえば、シエナ派のシモーネ・マルティニの華麗な作品が印象的だ。驚くべき知らせに身をよじる聖母、天使との間に置かれたユリの花は純潔の印だという。

ミケランジェロは彫刻家、建築家として有名であるが、絵画にもその生涯を通じ多くの時間を費やし名作を残している。ローマのシステイーナ礼拝堂の「天地創造」や「最後の審判」をはじめ、ウフィツィ美術館所蔵の「聖家族」は見事な作品だ。幼いキリストをマリアの右肩にのせ、ヨゼフ、キリスト、マリアの三人の顔を画面の中で集中させ視線が分散しないように工夫した家族の温か味が伝わる微笑ましい絵である。

次に忘れてならないのが、ルネッサンス絵画の一つの頂点を極めたラファエロである。今回の旅で私達はウルビーノの彼の生家に立ち寄る機会を得たが、父も画家であったので最初は父について学んだ後、ウンブリア派の大家のもとで優雅で洗練された描写法を修業したことを知った。その後フィレンツェではレオナルド、ローマではミケランジェロを知るこ

となるが、この二人の相對する芸術理念のいづれにも傾かず、ひたすら宗教的絶対真理を求め古典主義絵画を完成させた。ここには二十五歳頃の作といわれる「自画像」と、同時期の「ひわの聖母」およびローマ法皇の肖像画「レオX世」が展示され、ひわ（小鳥）を見守る聖母子、なかでも聖母の眼差しはこよなく優しく美しく描かれ印象的だった。

○
フィレンツェの天空に高くそびえるドゥオモは正式には「サンタマリア・デル・フィオーレ」といい、「花のサンタマリア教会」との意味だ。ドゥオモ広場に立つての第一印象は何といってもそのスケールの大きさである。間近かに立つてはその全容を視野に入れることはできず、遠くに引き下がってやっと巨大なクーポラを含む全体像を確かめることができる。色大理石を惜しみなく使ったこの建物は、まさにフィレンツェの財力を誇示したものだ。内部はシエナ・ドゥオモのような華やかさはないが、世界第三位の大教会といわれる量感に圧倒される。

ドゥオモの前にある八角形の洗礼堂の北側の扉にはギベルティが最初に制作したキリストの生涯が彫まれ、東側の扉もやはり、ギベルティの作であるがミケランジェロが「天国の門」と称賛した最高傑作で旧約聖書物語の浮き彫り。ギベルティは洗礼堂の二枚の扉に、なんと四十七年の歳月を費やし

たという。

ドゥオモに寄り添うように建つジョットの鐘楼は三色の大
理石を使った大変美しい建物で、ジョットのプランをピサノ
らが受け継いで完成したもの。

余談になるが、私達を案内してくれた南イタリア生まれで
フィレンツェに住むシルビオ氏は日本人女性と結婚している
ジョークに富む明るい青年だったが、奥さんはイラストレ
ーターでスペイン、イタリアに在住ののち一時帰国し、雑誌や
PR誌にイラストを描いている鈴木奈月さんといい、一九九
六年に「フィレンツェ四季暦」を出版した。なかなか軽快な
タッチで女性らしい視点から文と絵を巧みに配した面白い本
だ。その中で、

「もし私が大男で神様がこの世の人間たちが作った建造
物で一つだけ与えると言ったら、間違いない私はこのフィ
レンツェの大聖堂を選ぶわ。円蓋部分を切り離し、その
字のごとく蓋にして宝物入れにするの。すぐ横に立って
いるジョットの鐘楼は、そうねえ、ペン立てにするわ。
なかなかいいアイデアだと思わない？」そう夫に言う
と、「この罰当たり」という返事がすぐ返ってきた。
というくだりがある。なかなか言い得て妙である。

○
ウフィツイ美術館、ドゥオモを巡りシニョリー広場に出る。

中世以来フィレンツェの政治的、社会的中心でありつづけた広場で、見るからに権力の象徴という感じの厳しい城塞風のヴェッキオ宮殿が正面にある。この建物はフィレンツェ共和国と共に常に政庁舎として使われ、今日も市庁舎として活用されている。建物の上層階窓には共和政共同体の紋章がずら



ミケランジェロ広場よりフィレンツェ市街を望む巨大なクーボラはドウオモ、手前はアルノ川（生田・画）

りと並び、また塔の頂上にはボールをのぼるライオン像が目に入る。

アルノ川に架かるフィレンツェ最古の橋、ポンテ・ヴェッキオに足を運ぶ。ローマ時代からの木造橋は幾度かの洪水で流され一三四五年、現在の石造りの橋になった。橋の両側には貴金属や宝石を扱う店が並び、橋に通じる通りから歩いていくと橋に気付かず、いつの間にか橋の上に来ていくという感じ、橋上はショッピング街で、片側の店の上をヴァザリー回廊が通っている。橋の中央部の両側は店の並びが途切れていて、ここからアルノ川の素晴らしい眺望を楽しむことができる。ポンテ・ヴェッキオはフィレンツェのシンボルの存在だ。

アルノ川沿いに「イルパピロ」という店があったので入ってみる。今回の旅行で機会があれば訪れてみたいと思っていた有名な装飾紙の店だ。訪問に備え、装飾紙について予習しておいたことが役立ち理解し易かった。この特徴である「パピエクブ」という装飾紙の製法は、十七世紀フランスのルイ十三世に仕えた製本士メース・ルートにより考案された技法で、マールに似た色調の装飾紙をつくったため「マール・ペーパー」とも呼ばれ、日本でも「マール紙」で通っている。

この種のペーパー技法は十七世紀以降ヨーロッパ各地で盛んになり、二十世紀初頭までの製本には不可欠のものだったが、今では殆ど使われず「イルパピロ」だけがこの伝統を守っているという。一つ一つが手作りのため、全く同じものが一つもない。デザインはクラシックでシックな感覚、流行に流されない伝統のみがもつ味わいを保つ。

この手作りの方法は「パビエクラブ」といわれる最も古い手法だが、これを用いると材料やプロセスを変化させることで幅広い色調とデザインを表現することができる。デザインのベースは「クラブ」と称する容器の中の液体。水と各種の草木から作られた溶液で、その液面に絵具を垂らし、櫛、刷毛などを使って液面のパターンを紙に転写する。ベースが液体で流動的だから全く同じものを作ることがむずかしく、そのためよく似たパターンを不自然でなく二つ以上作ることが最も高度な技術といわれている。

また、興味深いのは「フィレンツェ紙の技法のルーツは日本の墨流し」という説だ。墨流しは水の上に墨を垂らし、その上に紙を浮かべ墨の波紋を移しとるものだ。

「イルパピロ」の店内には色彩豊かな装飾紙をはじめ、本やノートの表紙を飾る製品や、文房具類、また表面をすっかりおあってマーブルかと思わせる小物品などが並べてあり、楽しくショッピングできる店だった。

○
フィレンツェは最近ではグッチやフェラガモなどの有名ブティックの本店があるイタリア・ファッシヨンの町でもある。大店舗でのショッピングの場合、総じて売場面積や客数の割りに店員が少ないので短い時間で用を足すためには、予め前もって品定めをしておいて店員が来たらまとめて一気に買うのがコツ。

フェラガモやグッチの店内を覗き、街行く人々の間に加わり街のたたずまいや雰囲気を感じながら、ここはイタリアとジェラートを頬張りホテルへ向かった。

○
イタリアが統一されたのは十九世紀に入ってからだ。それまでの都市国家時代には異国支配の影響も受け、当然ながら各地方毎に変化に富んだ食文化が根付いていたことは容易に理解できる。だからこそ、イタリア料理といっても「これがイタリア料理だ」と言い切れるものではなく、各地方により料理は全く異なってくる。近隣のEU諸国とくらべてみても、イタリア程、郷土料理に変化のある国も珍しいというわけ。

トスカナ料理には太陽と土の匂いがあるといわれるように農民の家庭料理がもとになっている。その特徴は食材が豊富なことで、大地の恵みを使った農民料理とメディチ家の美食文化が一体となり今日のトスカナ料理が育まれた。仔牛

やイノシシ、羊を使った肉料理や野禽料理も一般的。私達は仔牛の肉料理を注文する。それにはキャンティワインの赤がよく似合う。ジェラートもルネッサンスの頃フィレンツェで生まれ、生みの親は他でもないメディチ家だという。

なかなかムードのある落ち着いたレストランで、俄か仕込みの昼間見聞きした町の風景や知識を話題にしながら夜の更

け行くのも忘れた一時だった。

翌朝、小高いミケランジェロ広場に立ち寄り、アルノ川の流れと数々の橋、ドウオモをはじめ市街の主だった建物を一望した。街中の屋根が赤一色に染まる景観は実に素晴らしく、そのまま額縁に納まる程美しかった。
(一九九六)

故郷を思わざるの記

小田 武次郎 (春日町)



『山ざる』の編集者から一筆書けとのご注文を受け、ハタと困った。書くべき懐かしい思い出が浮かんでこないのである。確かに私は、春日町(大路村)出身、幼い頃は柏原町で過ごしたが、父が当時の電灯会社

(帝国電灯→東京電灯→京都電灯→関西配電と名称変更)の地方営業所長をやっていた関係から転勤が多い。そのため私は柏原小学校一年の終わりで丹後の峰山町へ移った。以来柏

原とは縁が切れ、後は父の転勤に伴って八鹿町、豊岡町(現在豊岡市)へ移動した。一個所に十年はおろか五年も定着しない生活(その間、中学は宮津、大学は東京)だったので、柏原に対する望郷の念は極めて薄い。

この種、郷友会誌に書くことは決まっている。ふるさと懐かし”の話である。でも、依頼原稿は断わらぬ主義だから、えいままよ、何か書こうと思ひ原稿用紙に向かった。傘寿も過ぎたことだし、自分の越し方でも書いて、責めを果たそうと思った次第。

私の名が郷友会々員名簿に載っているのは、老妻が旧制柏原高女卒(出身は柏原町下小倉)で会員だからではないかと勝手に想像している。妻以外の関係する人といえば、元衆議院議員・内閣官房副長官だった佐々木盛雄氏で、氏は私の叔父(母の弟)に当たること。何十年前だか忘れたが、私が時

事通信社の政治記者時代、内閣官房次長（今の名称は内閣官房副長官）の有田喜一氏に取材で度々会い、その後、東京の郷友会支部懇談会で顔を合わせた程度である。会員にしていただくいわれはないのだが、いつの間にか、妻の名前と並んで、私の名が書かれる光栄に浴したわけだ。

親のスネかじりの学生時代のことを書いても仕方ないので省く。早稲田大学政経学部政治学科を卒業したのが昭和十七年九月（戦時中のため大学は二年半に短縮、なお雨中の行進で有名な学徒動員は翌昭和十八年）、そして十月初めには軍隊に放り込まれた。あつという間の出来事である。入隊は姫路野砲兵連隊山砲中隊、内務班での初年兵いじめについてはくどくどと述べないが、平手打ち、対抗ビンタ、長時間の腕立て伏せと捧げ銃、軍靴の底なめ、メシ抜きなどひととおりは経験した。

幹部候補生になって北支・保定の予備士官学校で教育を受けたが、ここでの「序列」が私の運命を決めた。普通は教育が終われば原隊に復帰するのだが、帰国直前に「異変」が起きた。各隊復帰は序列の上半分だけ、下半分は他兵科へ転属というわけ。私は転属組で朝鮮半島京城（ソウル）の高射砲部隊に配属、中尉で敗戦を迎え、今も生き長らえている。

原隊復帰組はどうなったか。風の便りによると、南方戦線に派遣され、輸送途中に敵の魚雷攻撃を受け、あわれ海の藻

くずと消えたという。私は決して運命論者ではない。運命がすべてを決めるのだから努力はムダなどと怠げ者の論理を吐くつもりはない。しかし、それにしても、いいようのない運命のいたずらである。「運命は人間を押し曲げることはできるが、人間は運命を押し曲げることはできない」とは、十九世紀ロシアのリアリズム作家ニコライ・ゴーゴリの至言。

敗戦二年後に時事通信社に入社、私の政治記者生活が始まった。ここは軍隊の自己否定の場とは正反対の自己主張の世界、個が全体に埋没することのないところである。ここで私の人生観の骨格が形成された。私がワセダの政治学科に入ったり、政治記者になったりしたのは、叔父の佐々木氏が、報知新聞の政治記者として活躍していたのに触発された面もあったかもしれない。

時事時代での自己主張の強さと幅は拡大していった。そして高揚した。頭は高くなるばかり。「汝の足下を掘り下げよ」といった名言から遠ざかっていく自分を発見した時には、もう定年が近づいていた。

私は現在八十一歳、糖尿病と共存すること三十年余、そのわりには元氣と友人にはいわれる。バラ作り、政治評論など雑文書きで暇をつぶしている。私より元氣なのが佐々木氏である。九十一歳にもかかわらず、毎日自分の事務所に通い、国を憂いて頑張っている。叔父にあやかりたいと思うこと切

である。時々叔父の事務所に顔を出し、二人して政治を語り、かつ慨嘆している。

物流、情報のマスコミユニケーションの発達で、世の中均質化が著しい。昔は、いなかの娘さん、お年寄りは一目でわかかったが、今は都会と変わらない。茶髪、ミニスカート、腰にビッタリのズボンにハイヒールの氾濫である。結構なことともいえるが、反面、特色がなくなった。その地域々々の

時間を計る



岩 槻 邦 男 (市島町)

時間にはいろんな長さがある、と
いったら、自然科学を専攻している
者がそんな非科学的なことをいうの
か、と咎められる。しかし、同じ長
さの時間が、まったく別の長さの役
割を果たすことは誰でもが経験して

いることである。絶対的な時間の長さ
と、個々の事象に関わる時間の長さ
の感じ方は全く別なのである。

「らしさ」が薄れていく。スマートにはなつたかわりに手応えがなくなった。金太郎アメ、横並び主義、いいたいこともいわない、いやいえない。権威に弱い、お上だのみ、無責任、常識がない、数え上げれば切りがない。別に昔に戻れ、保守反動になれとはいわぬが、もう少し自己確立、ナシヨナリズムがあつてもよいと思う。敗戦の後遺症からもういいかげんに抜け出す時期に来ているのではないか。

フランスの友人が食事に家へ呼んでくれて出かけると、ベルサイユ宮殿のすぐ側にある家は、宮殿より遙かに古いのだという。ギーギーと鳴る階段を上がって部屋に入れば、床も平らでないような気がする。しかし、その古い建物を、ていねいに手を入れて今も使っている。彼はその古さにたまらない魅力を感じるようで、その建物から出る気は毛頭ないようである。

デンマークの友人は、オールフス大学の植物学教室の創設者だが、オールフス市外約三十キロのところ平家建の家を立てた。しっかりした基礎工事を固執したら、この上にエンパイアステートビルでも建てるのでかと皮肉られたと笑っていた。

南オーストラリア州で、沙漠地帯にぼつねんと廃虚がある。

かつて人が暮らしていたのに、乾燥化が激しくて住めなくなり、放棄したものだという。説明版を呼んでいたキュー植物園の友人が、思わず、この家をつくったのは俺の家をつくったのと同じ年だったんだ、と呟いた。

私たちの祖先の日本人は、山紫水明の恵みに満たされていたものだから、資源の使い方は少々荒っぽいものだった。「湯水のごとく」ものを消費することが、ひつの美意識につながった。使い捨ての割り箸に杉の柾目を使って贅の極致とするなど、他の国では考えられないことである。アラビアでは水を支える宝だし、ヨーロッパでは、お祖母さんから遺贈された銀のナイフフォークは客をもてなす最大の武器だった。木と紙でつくった日本の家はうつろいやすさを示し、土と石で固めた西欧の家はいつまでも続くことで乏しい資源の乱用を戒めていた。西欧には備品文化が発達し、日本には割り箸文化が定着していたといえる。

明治の文明開化以後、日本では西欧崇拜が始まり、西欧に追いつけ追いこせがモットーとなって実利優先の考えが、自然との共存を生きる伝統的な日本文化を凌駕することになった。富国強兵が挫折した太平洋戦争後は、物質崇拜の信仰がさらに普遍的な指導原理となっている。

さて、何でも西欧をよしとする考えからか、コンクリートで固めた建物が建てられることが多くなってきた。しかし、

フランスの友人が古いものを愛する備品文化の伝統は日本へは入ってこなかった。木造の建物を時々建て直したように、コンクリートで固めた建物さえ、古くなったらぶち壊して建て直す。元来、木造の建物だからといって消耗品扱いばかりしていたわけではない。法隆寺を例に出すまでもなく、木造だから消耗品というのではなかったはずである。割り箸に杉の柾目を使う贅は、法隆寺を千年護り通す行為と通じているのである。

さて、あなたは何年生きていますか、と尋ねれば、たいいていの人は自分の年齢だけの年数を答える。追究すると、自分の個体の始まりは母親の胎内からの時間になると計算する。それでも、自分の生命は自分が創設したものではなくて、親から譲られたものであることを指摘し、さらに生命のもとを訪ねれば、地球上に生きているすべての生物は、地球上に生命が発生した三十数億年前からの生命をもっているのだという事実思い到る。

それだけでない、自分の身体と思っているものも、その素材である原子は常に置き換わっていて、一年もすれば、身体をつくっている材料は全く別の原子の集合体になっているという計算もできる。一年と続かない身体に、三十数億年続いている生命を載せているのが、人という生き物なのである。

戸籍に人が記録した時間を、自分の生きている時間だなどというだけで納得する根拠は一体何だろう。

今日のことしか考えない暮らしを、日本人は最近特に固執

病を得てから

今 田 二三夫（春日町）

丁度二年前の五月、私は突然病を得て入院、緊急手術を受けた。病名は狭心症である。



心臓の筋肉に血液を供給している冠動脈が狭くなって、血液の流れが悪くなり、息切れや胸が苦しくなる病気である。同じ種類のものに心筋梗塞があるが、これは血流が途絶えて心臓の筋肉が壊死し、胸に激痛を覚えるもので、共に突然死の

している。悠久に生きる生命は、日本人の血のなかで、それをどう思っているのだろうか、考え込んでしまうこのごろである。

原因になる恐ろしいものである。

私は大手術の結果、幸運にも生命を救われた。二十年ほど前にはほとんどなかった冠動脈手術が、今は大変多くなり、その技術も向上し、ほとんど成功するようになったのである。しかし、それはあくまで手遅れにならない状態でのことである。著名人でも多くがこの病で生命を落としているのを見受ける。私が手術を受けた病院は、心臓外科では、日本を代表する病院で、全国から患者が紹介されて手術を待っている。何と心臓を病む人の多いことかと驚くばかりであった。

自覚症状は手術の一週間前の昼食後に起きた。胸が少々気持ち悪くなった。胃に何か異変でもあったのだろうぐらいに思い、少し休憩しているとおさまった。その後、毎食後に息苦しさが増わりそれが段々強くなっていった。自宅近くの病院に駆け込みすぐ入院となった。ICU室で点滴による治療が始まった。治療が三日間続いた後に、軽い食事を取ったが快方に向かうどころか、今にも息が途絶えそうな強烈な苦しさが襲った。この病院では、これ以上の治療は不可能だった

ので、別の病院へ救急車で移された。到着するやすすぐ検査室へ運ばれた。検査が進んだ時、「これはひどい、すぐ手術だ」と言う声を聞いた。私はその瞬間、恐怖のどん底に落とされ思いがした。

「手術」は私にとって最も嫌な言葉だったのである。手術台の上に乗せられた私は、まさに組板の鯉だった。何人も看護婦さんが迅速に準備を進めながら、「すぐ楽になりますから頑張らなさいよ」と、耳元で何度も励ましてくれた。「ひよっとすると場所が場所だけに危ういのかも知れない」との不安が脳裏をかすめた時、家族の顔が浮かび涙が出て仕方がなかった。全身麻酔が打たれ、後は深い深い眠りに入った。目が覚めるとICU室の椅子だった。看護婦さんから「おめでとう」と声をかけられ、手術は成功し、命は助かったのだ」と感激の瞬間だった。手術の間、待合室で待機していた家族が面会にきた時、今度はうれし涙で目がうるんでしまった。時計の針は午後十一時を回っていた。検査から手術終了まで七時間もかかった、三本のバイパス手術だったのである。軽症の患者は「風船治療」と言って、冠動脈の狭くなった部分を風船でふくらませる方法が行われるが、私の場合はそれでは間に合わず、別の三か所の部位から血管を取り、冠動脈の迂回路（バイパス）を作ったのである。この手術も緊

急に行う場合は、やはり危険率が高いことを聞き、安堵の気持ちで一杯であった。

現在も通院し、投薬を受けているが、ゴルフが出来るまでに回復したことを大変感謝している毎日である。人は生涯のどこかで病む時がある。私も今まで病氣らしい病氣は一度もしたことがないと、心ひそかに健康を誇っていたが脆くも崩れた。痛みや吐き気を感じ、点滴注射だらけの身となってベッドに横たわっていると、はじめて元氣な仲間と比較して、不幸に思い、病氣から抜け出る日を待ち望んだ。そして病状が日に日に回復していくと、取り返される健康のすばらしさを一杯に感じたのである。平素の健康のありがたさを身にしみて考えさせられた。

私のような病は動脈硬化によってもたらされるもので、誰でも可能性が高い。このような危急時に、生死の境は時の運に極めて大きく左右されることも痛感した。移された病院では、毎日のように手術が行われているが、たまたまその日はキャンセルになった。スタッフが手空き状態のところへタイミンクよく運び込まれたことは、幸運であったというほかない。さらに医学の進歩にも驚き平伏した。左腕、胸、胃と三カ所から一ミリ以下の細い動脈をとり、心臓にくっつける作業で、大変高度な技術が要ることだった。そのうえ手術の間

は、心臓に代わって血液を体内に循環させる人工心肺に切り替えて、心臓を一時止められたのである。私は死の世界をさまよったといっても過言ではないだろう。さらに最近では心臓の拍動を止めずに行う方法や、胸骨も切らないで左胸当たり

私の趣味『ボールルームダンス』

大垣 忠 男（山南町）

懐かしい「丹波の思い出」については、以前書いたことがあるので、今回は私の趣味について、郷友会誌には一寸ばかり不似合いかと思いましたが、敢えて筆をとらせて頂きました。

皆さん、ボールルームダンスって何だかご存じですか、一般に世間で言われている「社交ダンス」のことです。欧米では「社交ダンス」のことを「ボールルームダンス」と呼んでいるそうです。私は「社交ダンス」という言葉の響きがあんまり好きではありません。なぜならば「ダンス」と聞いただけで眉を蹙めて毛嫌いな人がいるからです。

一般の人は、「ダンス」と言えばすぐに薄暗いクラブやバー

を少し切って行う方法も進んでいることを知り、その技術革新の速さに驚嘆せざるを得ない。

運よく救われたことに感謝しつつ、生き延びた生命を大切に、私なりに悔いのない日々を送るよう心掛けている。

での男女が抱擁して音楽に合わせながら身体を揺らしている、あの映画やテレビでのドラマのシーンを連想することでしょう。そんな不健康なイメージを払拭したいから、私はあえて「ボールルームダンス」または「スポーツダンス」と呼んでいます。我々のダンスは、正しい姿勢で男女が組む、これをホールドといつて、抱擁・エンブレースとは明確に区別しています、と威張ってはみても、世間一般の人は、まだまだ健康的なスポーツとしては、認知していないのが実情です。

会社も間もなく定年・これからの高齢化に向かい、何か趣味でも持たねばと思ひ、健康増進・ストレッチ解消・にと思つて軽い気持ちで、五十の手習いを始めたのが運のつき「ダンスは麻薬」その魅力に、すっかりとりつかれて、今では暇を見つけては練習に励んでいます。私も今年の六月、古稀を迎えました、お陰様で健康に恵まれ満員電車で揺られながら、毎日、日本橋の会社まで元気で通勤しています。

そこでまず「ダンスの効用」について産業医・労働衛生コ

ンサルタントの三宅宏先生が、次のように述べています。

一、脳溢血、心発作、等急死の事故例を殆ど聞かない（ゴルフやジョギングではときどき聞く）。

二、自分で運動量を調節できる。

三、足だけでなくボディ、腕、頭部の全身的運動になる。

四、次第に高度な複雑な運動ができるようになる。

五、老年者でも楽しく行っている。

六、音楽が楽しい。

七、長時間続けると次第に良い姿勢になる。

八、社交に役に立つ。

九、技術的に高度になれば美的表現の追求ができる。

十、更に高度になれば創作もできる。

以上のうち九、十は別として、殆どが暗黙のうちに認められているだろう、人間は時間と共に必ず老化するが、運動をしなければ老化は加速され、反対に過激な運動をするスポーツ障害を受ける。老化を寄せつけないために、ほとんどの運動がよい。社交ダンスは十項目の理由で、働く人々がまだ若いうちからスポーツとして楽しむのに理想的だと思ふ。

（『私のダンス考』日本医事新報・第三三六号・昭和六

十三年十月二十九日より抜粋）

私も少しでも多くの、中高年の方々に「ダンス」の楽しさと効用を知ってもらおうと、十年程前に取った、日本ボールルームダンス連盟のInstructorの資格を活用して、大田区雪谷文化センターで、毎週日曜日に中高年を対象に、ダンスのサークルで自分も楽しみながら指導しています。明るく広いフロアで音楽に乗って大勢の人が汗を流しながら、楽しく自由に踊っている姿を見ると、はじめに書いたような暗いイメージなど想像もできません。

我々ダンス仲間では「ダンス」は、中高年の健康維持・増進のための最適なスポーツとして楽しんでいます。因に、日本アマチュアダンス協会（JADA）では、日本体育協会にも加盟していますし、更に加えて『ボールルームダンス』はオリンピックの正式種目として、平成九年九月四日、スイスのローザンヌで開かれた第一〇六回IOC（国際オリンピック委員会）理事会で承認決定されました。二〇〇〇年のシドニー大会には間に合いませんが、華麗なステップが氷上のアイスダンスと同様にフロア上で日本の選手も世界の強豪を相手に熱戦が繰り広げられることも夢ではなくなったようです。

我々もグループの輪を広げながらダンスが健康的に発展するように願って、ますます頑張っていきたいと思っています。

廃棄物の有効利用について

酒井重男（柏原町）

最近、環境ホルモン、特に廃棄物の焼却時に生成されるダイオキシンが、我々の健康に極めて有害であるということが問題になっております。ゴミは焼却すれば温度の問題もありますが、多かれ少なかれダイオキシンの生成は避けることができません。現在のような快適性・利便性を追求する消費生活のスタイルを放置すれば、ゴミは増え続けます。我々は戦前に生活していたように、また、現在、ドイツが行なっているような徹底したりサイクル、リユースのゴミを出さない生活スタイルに戻す必要があると思います。

ところで、最近になり地球環境問題への関心の高まりを背景に、今まで廃棄されていた食品の加工残渣から、有価物を利用した製品が次々に開発されてきています。そこで、私が最近、関心しました二、三の例について紹介します。

一、ブナサケからサケ節

シロサケは産卵が近づくとき表皮に婚姻色と言われる赤褐色の斑模様が発現するブナ化（成熟度）が進行します。産卵を

終えたＣブナサケは外觀や風味の上から、価値はほとんどなく飼料や肥料として利用されるか、廃棄物として捨てられています。そこで、Ｃブナサケからサケ節の製造を目的に、北海道立食品加工研究センターが研究開発を行い、帯広の（株）江戸屋がその実用化を行い、平成十年四月に商品化に成功しました。

サケ節は三枚におろしたサケの生肉に、タンパク質分解酵素を噴霧し、タンパク質をアミノ酸に分解した後、焙乾と室温放置を四〜六回繰り返して、水分約二〇％の荒節を製造し、機械で削り節にします。

サケ節のイノシン酸はカツオ節より少ないのですが、グルタミン酸はカツオ節の約一二倍含まれており、官能評価ではカツオ節と比較して遜色ない旨味をもち、苦みが少ないという評価で現在、市販されています。

二、貝殻からカルシウム剤

カキ及びホタテ貝殻はそれぞれ年間約二〇万トン、約三〇万トン排出されており、一部は肥料、飼料、上水道ろ過材などに利用されていますが、かなりの部分は未利用のまま山積みされているのが実情です。そこで、三島市に近い（株）カルナーは、カキやホタテの貝類の有効利用に取り組み、カルシウム剤であるカルナーカルシウムを商品化しました。

カキやホタテの貝殻をきれいに洗浄した後、高温の電気炉にて約一時間焼き、これをしー乳酸または乳酸グルコン酸に溶かすと、乳酸カルシウムまたは乳酸グルコン酸カルシウムが得られます。これらカルシウムまたは非常によく溶け、吸湿性がなく骨粉や卵殻カルシウムと異なりザラツキや違和感のない粉末です。食品への応用としては飲料、炊飯、健康食品、菓子類などに利用されています。

三、オカラ入り豆腐

日本ではオカラの大部分は豆腐・凍豆腐製造工程から副生し、年間約八〇万トンに及びます。オカラには大豆固形物の約三三%を占め、搾りきれない豆乳が大量に残り、栄養価値がある食品素材ですが、水分が多く腐敗し易いため有効利用されているのは一部に過ぎません。そこで、協業組合郡山豆

腐センターは食物繊維を多量に含んだオカラ入り豆腐を商品化しました。

大豆を水に浸漬・粉碎・煮沸し、豆乳とオカラに分離した後オカラを微細化し、これに植物細胞壁分解酵素を加えて、パサパサの状態から滑らかなペースト状に分解します。このオカラペーストを豆乳に対して約五〇%加えて、通常の方法によりオカラ入り豆腐を製造します。オカラ入り豆腐は低分子化された食物繊維や、蔗糖、オリゴ糖などの糖類が多量に含まれているため、甘味があつて美味しく栄養価があり、福島県下では多量に販売されています。

以上に述べましたように、今まで廃棄されていたものから有価物を有効に利用した商品が開発されており、これからこのような新製品が生まれることを期待します。

毎日となった。

丹波の夏といえば、子供の頃の茅葺家のひんやりとした土間が懐かしく想い出される。

私は、昭和三十四年の春、生まれ故郷である丹波・青垣から東京へ出た。今年で、早や四十年になる。

当時、中学、高校を卒業すると、子供達は地元を離れてい

故郷丹波を原点に

足立 東一郎（青垣町）

今年の東京の夏は、梅雨明け以降、猛暑の連続で、厳しい

くのが当たり前の時代であった。私の場合は、兄二人がすでに東京に住んでいたこともあって、何となく行く先を東京と決め込んでいた。

春とはいえ、丹波はまだまだ寒さが残っていたが、着いた東京は暖かく、コートもいらぬ陽気であった。

その年は、現天皇、皇后のご成婚で、東京だけでなく日本中がお祝いムードに沸き立っていた。

東京での生活が始まったのが、我が国の高度経済成長が始まった頃でもあった。洗濯機、冷蔵庫、テレビ等の電化製品が、一般家庭にも普及し始め、若者達のレジャーも盛んで、ロックも流行っていた。

貧乏学生の私には、いずれも高嶺の花で、洗濯にはタライを使っていた。遊びといえば、映画を観るくらい。安い所で四〇円。洋画の封切りが一五〇円、封切りを観る余裕はなかった。

あとは、毎月の奨学金を手にした時に、街の大衆食堂でカッライスを食えることが楽しみであった。値段は一三〇円、普段は学食で、カレー四〇円、定食五〇円の頃だったので、自分では随分、奮発したつもりであった。本当においしかった記憶がある。ともかく金はなかった。

バイトは、夏、冬などの休みの時ぐらいで、レジャーや買物のためにするバイトなどは、論外であった。何分にも、

田舎生の生真面目さが禍いして踏み切れなかったし、貧しい暮らしの中から進学させてくれた父親の思いをいつも意識していたこともあった。

昭和三十八年、卒業とともに東京都に採用となり、公務員としての生活が始まった。

とくに、公務員志望であった訳ではない。法学部出身であったことと、都に勤めていた研究室の先輩が勧めてくれたことによる。卒業後は、すぐに就職しなければならぬ状況にあったので、それならと試験を受け、いつしか、生涯を公務員として働くことになってしまった。

都の仕事は実に幅広く、職場も沢山ある。私は、今年で在職三十七年になり、その間、いわゆる異動という形で、職場を十数回変わっている。保健、医療の現場が比較的長いが、それぞれ違う職場で働いてきた。結果的には、種々、様々な仕事を経験し、数多くの業種の人たちと出会えたことが唯一の収穫であった。

これまでは、どちらかというところ、ひたすら愚直に仕事をし、平凡で質素一途の生活であったと思う。生まれついた性格と丹波人特有の純朴さや忍耐強さがその根底にあったからだと言っている。

来年は、退職を迎え、現役を退くことになる。寂しさはあるけれど、公務員という堅い、窮屈な肩書きから解放される

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られています。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。なお、編集上以下のように分類しております。

- ①ふるさと随想▶ふるさとに関するさまざまな思い出や感想など
- ②近況・エッセイ▶旅行や趣味／世相雑感／私の近況／文芸
- ③インフォメーション▶展覧会／各種催し／同窓会／本の紹介
- ④こんなテーマの原稿も募集しています。
 - ▶ふるさと研究／ふるさとの祭り／ふるさとの民話と伝説
 - ▶わが師を語る／わが出発の時（ふるさとを離れる時）
 - ▶丹波を撮る（帰郷の際に撮ったスナップ・ふるさとでの思い出の写真）

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成12年8月20日です。

原稿枚数：400字詰用紙4～5枚程度

送付先：〒104-0044 東京都中央区

明石町2-16-206

(株)ホンゴ出版内

『山ざる』編集部

TEL 03-3248-6625

FAX 03-3248-6626

という、ほっとしたような気分も、実はある。世に誇れるような活躍や業績も残せなかったが、財産もなくこれといった取り柄もない自分が、幸いにも健康と家族に恵まれ、曲がりなりに一家を構えることができた。もって、瞑すべしと考えている。

今回、図らずも『山ざる』誌に投稿する機会が得られ、改めて、来し方を振り返ると、今日までの自分は、故郷丹波の自然や田畑で培われた身体と、柏原までの高校三年間の自転

車通学で鍛えられた体力があったればこそだと、つくづく思う。もっとも自分の原点である故郷丹波に感謝しなくてはいけないと反省しているこの頃である。



山鳥 銳男 先生

(一九〇四〜一九六一)



孤高の碩学

徳田八郎衛 (柏原町)

一、経歴

山鳥銳男しじお先生は昭和十八年春、京都府立宮津中学校から兵庫県立柏原中学校へ転入され、昭和三十六年早春に他界されるまで同校および新制柏原高校で国語・漢文教師として勤務された。その鶴のような容姿、マリオネットのような仕草、学者のような、いや学者そのものの博識と自己研鑽は有名で、受講したことはなくとも「鳥さん」を

知らぬ者はいない。同じ国語・漢文担当の「ポロさん」こと葛谷俊道教諭や日展連続入選の「チャイナ」こと山本求画伯と並ぶ名物教師だった。

先生の旧姓は関口である。大正十三年春に御影師範を卒業し母校の多紀郡福住村尋常・高等小学校へ訓導として赴任された。ここの高等科から師範学校へ進まれたのだ。その御影師範での想い出を昭和三十一年の柏高生徒会誌「柏陵」創刊号にこう記されている。

「私は十七の年から廿一年の年まで今の年の数え方によれば十五才から十九才迄の四年間を師範学校で過ごした。

その間に影響を受けた先生や友人の数は甚だ多い。又其の生活の様式は今も私の生活に食込んで私の生活を規制している。(中略) 一体師範学校と云う学校は今は無いう学校で諸君の知らない学校である。又年の行った人でそれを知っている人も其の悪口許り云う。併し私にとつて師範学校は懐しい所であつた。(中略) 其の一番奥には廊下と板戸一枚を隔て寮長の役宅がある。寮長というのは舎監の先生で、校長教頭以下八人の先生方が家族を連れて其寮長宅に住んで居られるのである。従つて板の戸一枚が境であつて、それを開けて舎生は先生の座敷へお伺いし、それを開けて先生は舎生の所へ出て来られるのである。舎生と寮長の先生の家族とは一つであつて、舎生が皆学校へ出かけて留守の時急に雨でも降ってきたりすると先生の奥さんが各室を見廻つて干し物などあれば取入れて下さったりした。御影師範の寄宿舎は普通中学

校の様に舎監が宿直で勤務するのと全く違っていた。」

山鳥先生の同期生の手で「兵庫県御影師範学校卒業五十周年記念誌」が昭和四十八年に発刊された。卒業後、水上郡内各地の尋常・高等小学校で教鞭をとられた荻野利夫さんの寄稿によると山鳥先生は当時から大変な秀才で、友人達が期末試験のために勉強をしても「授業中に聞いたことが出るだけなのに試験勉強など愚かな行為」と一切手をつけなかったという。

二年後の春には武庫郡本山尋常・高等小学校へ転出されたが、その年の暮には中学校国語科教員の、さらに二年後の昭和三年には漢文科教員の試験検定に見事合格された。そこで昭和三年春、名門灘中学校に教諭として招聘されている。「大学は出たけれど……」の不況期であるし、小学校訓導の初任給は五十円、中学校の教諭だと百円という格差があったと聞く。前途洋々と祝

福されたに違いない。

だが関口青年の挑戦はさらに続き、昭和五年春、東北帝国大学法文学部国語学科の入試に合格される。在学中に郷里の名家、山鳥家から乞われて婿養子となり、山鳥と改姓して昭和八年に卒業し宮津中学校へ赴任された。そして昭和十八年から丁度十八年間、柏中・柏高生の訓育に当られるのである。

二 作文教育

私は入学するや早速、国語(甲)を教わったが、最初の課題が作文、それも自分について書くものだった。まだ十五歳だから自叙伝というよりは生い立ちの記だ。周囲の「アホクサ」という眩きの中で、戦時中の幼年期の記憶や体験をボケ老人になるまでに書いておくのも悪くはないと思ひ私は大真面目に取り組んだ。文学的、叙情的な表現や感懐は全くない、実に散文的、叙事的な記録を提出したが、次の時間に

級友の前で朗読されたのには閉口した。しかし先生の「このように主観を交えずに事実をキチンと記すのは大切なことです」という所見のお陰で、私のように詩歌には無縁な散文ライターも少しは自信を持てるようになった。

これが縁で山鳥先生がどのクラスでも作文課題に熱心なことで、かつては「丹波の方言だけで書く作文」を課題とされたことも知った。期末試験になると「試験用紙の裏側に何でも書きたいことを書いてよろしい」となる。表の方は白紙に近いくせに裏にはギッシリと「山鳥文法の押し付けで大学入試は絶望です」だの「晴天でも持ち歩いておられるあの雨傘は古ぼけていてみっともない」だのと好き勝手なことを書き綴った級友もいる。裏面だけは五重丸だったという。これも意見や事実をキチンと表わせるようにという先生のご意図だろうと思つた。

鳥さんは厳しい、頑固だと敬遠する

生徒も多かったが、たとえ親しまなくとも敬っていた。最近の師弟関係とは逆かもしれない。好き勝手というか自由奔放な教育の時代だった。都会の進学校では「傾向と対策」に励んでいるのに計算尺演算ばかり教える教師、教室で平然と紫煙を燻らす教師、教室へ到着した際の生徒の対応が悪いからと憤慨して職員室へ帰ってしまう教師と様々だった。

その中で鳥さんの几帳面さは目立った。風呂敷包みを小脇に抱えて定刻にキチンと教室へ現われる。消防車、救急車と表現する者もいたが鳥さんという愛称に阻まれて綽名にはならなかった。黒板の右端から左端までぎっしり板書されるが、どの字体も同じで絶対に崩れない。生活も授業も字もキチンとしていた。

厳しい方だと感じたのは、進級して新しい学級ごとに写真撮影を行った時である。何しろ全校で三十三クラスも

あるからクラスごとに撮影時間が指定される。あるクラスの担任が急用でも生じたのか少々遅れて来られたところ、学年主任の山鳥先生から厳しく叱責を受けたという話が伝わってきた。駆け出しの若い先生ではなく山鳥先生ぐらいの年配の先生である。ふつうは生徒のいない所で注意するものなのに厳しすぎると言う者もいた。だが私は感心した。

古い言葉であるが、鳥さんはまさに「活模範」である。自分で実践するだけでなく同僚にもそれを求められたのだ。教育というよりは訓育という言葉がピッタリ似合う教師だった。

やさしい面もあった。まだ柏原中学生の頃、クラブ活動で夕方の下校となると、くたびれた外套を着て雑糞を下げた和尚さん風の蒼白い紳士が校門前の坂道を登ってくる。これが著名な鳥さんだとは知らない女生徒たちが授業で習った「山鳥、ホロロホロロと：」

を輪唱するとニコニコしておられた。

三 孤高の教師

鳥さんが我ら田舎の高校生にはもったいないような高い識見を持つ先生であることは新入生にも直ぐに理解できた。今でいえば大学院を出て高校教師になったような方だ、もし師範学校に勤めておられたら今は学芸大学の教授ですよ、と評された若い先生もあった。だが単なる学識者ではなく、他人との容易な妥協を許さない自己の意見、信念を持つておられた。現代仮名遣いに代表される戦後の国語教育や、サッサと方向転換した戦後の社会思想そのものについては懐疑的というよりも否定的だった。

教室外ではあったが「軍備を持たない国家が有り得ますか」と述べられた時は、偽善とハダカの王様ばかりの中で正直な先生だなと感心した。終戦直後の先生の言動については当時生徒だっ

た大野善三さんが「山鳥鋭男先生のこ」と題して本誌第17号に詳細に記しておられる。大野さんは、終戦とともに押し寄せてきた民主主義が衆愚政治に墮落することを虞れ、国語の簡便化が不知不識のうちに文化の浅薄化を導くのではないかと憂えておられたのではないかと見ておられるが、十年後輩の私にもその通りに見え、山鳥先生の予見自体も正鵠を得ていると思われる。

だが、エモーショナルで浪花節的な大衆とはまた違うものを持ってもらった。「勝って泣き負けて泣くなどというのは可笑しいですよ。スポーツは楽しむものなのですから」という、運動部の顧問や生徒が聞けば激怒しそうな言葉もある。これは私の誘導質問に正直に応えて下さった所見であるが、信念を持った剛直な個性の山鳥先生ならではと思った。

好んで孤高を保ち、現世の栄華から

身を避けておられた先生の生活態度は写真の少なさにも反映されるのだろうか。今回の記事に合わせて先生独りの、それが適わなければ二、三人で撮影された写真を探したが、植田憲雄柏陵同窓会長のご尽力によって、ようやく一葉入手できただけであった。

山鳥先生が亡くなってから約四分の一世紀が過ぎた頃、丹波新聞昭和六十年五月二十六日号に「氷上郡の方言」と題する先生の研究が掲載され、十回以上にわたって連載された。先生の立派な研究が埋もれてしまうのを惜しんだ関係者が御子息にお願いして公開して頂いたと漏れ聞いたが、詳細は明らかでなく紙面にも記されていない。だがその序文の記述から、昭和三十年代初期にまとめられたものではないかと思量される。

四 あなた、よく入れたね

私にも郷里を去る日が近づいた。担

任教師へのご挨拶に母校の職員室へ入ったら山鳥先生と眼が合ってしまった。煙たかったが我らの学年主任である。ご挨拶しない訳にはいかない。柄にも

なく精一杯「よそ行き」の言葉で、幸運にも志望校へ転がり込めた報告と指導の御礼を申し上げたが、先生はやさしい眼で私を見詰めたまま何もおっしゃらない。直立不動のままの私には五分にも十分にも思える時間が経過した後、こう告げられた。「あなた、よく入れたね」

その頃も、その後も、私は美辞麗句に満ちた賛辞や祝辞を頂き、あるいは送ることになるが、こんな率直な祝いの言葉をもらったことも送ったことも嬉しくない。だが、どんな美辞麗句よりも嬉しく、こちらも率直にお返しした。

「自分もそう思います」

四年目の三月、卒論の試問が終わってホッとしたある日、下宿へ帰ると速達が出来ていた。すでに短大を終えて柏高

の体育教官室に勤務するA嬢からだ。多分、春の選抜野球に出場する柏高についての明るい話題だろうと思ったが、それは何と山鳥先生が三月四日に天へ

山鳥鋭男先生を偲んで

坂本 重雄（柏原町）

一 戦後の民主教育への転換期

一九四五（昭二〇）年太平洋戦争が終盤の四月、私は旧制の柏原中学に入學した。私たちの学年主任であり、国語・漢文の担当であった山鳥先生は、紺の詰襟やカーキ色の軍服風の上着、そして細いズボンを着用し、僧侶のような丸坊主の姿で、終戦の前後でもその変化はなく、風呂敷包みを愛用しておられた。授業のとき、黒板に教材用の文章を書き連ねられたが、字の書き損じや読み違いはなく、さすがに中学

帰られたことを告げるもので「本当に巨星墜つという想いでございます」と結んであった。信仰心薄き若者であったが思わず西の空に手を合わせた。

の先生はすごいと生徒たちは感嘆していた。

一九四五年八月の終戦は中学校のあり方や雰囲気をかえた。民主主義教育への転換で、多くの教師や大人たちが新しい社会での生き方を模索するなかで、先生の服装や言動はほとんど変わることとはなかった。反って、現代仮名遣いや漢字制限に反対する意見を授業のさいに公言されていた。先生は東北大学で国語学を学ばれ、山田孝雄教授の影響を受けられた。現代仮名遣いを推進する東京大学の時枝誠記教授を名指しで攻撃されていた。先生は長文の手紙をたびたび時枝教授に送付されたよう、受理されなかった封書を直接

見せて頂いたことがある。

一九四七年一月末、全官公労働者の二・一ゼネストに参加する日教組のスト実施をめくり、教職組の闘争委員長・荻野辰雄先生のスト決行宣言の熱弁のあと、山鳥先生は「私は教師です。ストには参加しません」と簡潔な反対表明をされた。先生同士のストをめぐる対立、意見表明を聞いた生徒たちは、賛否を問わず深い印象を受けたものがある。ただその直後、GHQのマッカーサー元帥によるスト中止指令により、ストが挫折し、二月初旬に予定されていた期末試験が、予定通り進められることになった。それで、学生側は試験実施延期要求ストを実施した。教組のスト中止理由の説明が不十分であったため、ストに反対表明をされた山鳥先生が、スト破りというよりも、唯一人でも信念を貫くという孤高の精神を示されたことに、感銘をいだいた生徒も少なくなかった。

二 先生の教育指導

一九四八年四月、学制改革により旧制柏原中学は新制柏原高校に昇格した。私たちは新制高校に無試験で編入学を認められ、結果として中高一貫教育で六年間、入船山麓の学舎で学生生活をおくることができた。高校では国文学班に所属し、更級日記など古典の輪読に参加した。一年以上級に由良琢郎さん（のちにペンクラブ会員）など熱心なメンバーがおられた。山鳥先生も受験勉強とは異なる独自の国文学研究を淡々と進められていた。授業でも特に作文指導に熱心で、提出した文章の長所をほめ、本人の意欲を自然に抽出されたように思う。

森鷗外の「渋江抽斎」や「阿部一族」を熱心に解説されても、史伝的作品の重みや封建社会の道德と「殉死」の解釈など、当時の私には理解できなかつた。ただ拝聴するだけで、質問など出しようもなかつた。しかし国漢のテス

トや作文については感想を受けることが多く、先生のお誘いを受けて下宿先を訪ねるようになり、少しずつ対応が変化していった。当初は、旧女学校の校門に近い織物学院の一室だったが雨漏りのする部屋でタライやオケを並べながら先生は苦笑されていた。最初は必死に準備した質問もすぐに消えてしまい何を話してよいのか息づまる時間の連続を体験した。

三 御自宅への訪問とその会話

碩学の先生が一中学生である私を一人前の人間として認め、雨漏りのする部屋で正座して対話の姿勢をとられたことを想い出す。その後、南多田の矢尾さん方に下宿を移られたが、そちらへも二度お訪ねした。先生のお宅の机上には、岩波文庫の赤版、青版などが積み重ねられ、読了後間もない文献の話から入られることが多かった。私の方は吉川英治「宮本武蔵」や菊池寛の

短編小説などの話を持出し、漱石や鴎外の作品に代表される純文学よりも、一般国民に読まれる大衆小説の方が、日本人の心に訴え、現実の生活を考えさせる事例が多いのではないかと質問したように記憶している。当時の私はテニス部の活動に熱心であり、映画を見ることも多く、大衆芸能や小説、スポーツを先生の前で論ずることになる。先生はそれでも、私の幼稚な意見に耳を傾けて下さり、テニスの県大会で準優勝で破れ、何とか三位に留まったときの戦術や、心理作戦の話題に非常に興味を持って付合って下さった。先生があまり得意ではない芸能や、スポーツを話題にして、時間を稼ぐ非礼な対応をしたにも関わらず、教室とは違った温顔で、謙虚な口振りで意見をのべられ、楽しそうな笑顔を拝見できた。

四 人間としての姿勢

一九五一年三月、大学進学で柏原を

離れた。夏休みなどで帰省すると、先生が私の家を訪ねて下さり、近況をご報告出来る機会が何回かあった。向き合って対話するときの、先生の態度は変らず謹厳そのものだった。新制大学の国語・国文学の教授として充分通用する実力を備えられた碩学であられることを確信させるものであった。

一九六一年三月四日、山鳥鋭男先生は他界された。

この時期、大学院の修士課程を終えて、大学の助手論文に集中していたため、柏原の自宅へ帰ることもなく、あ

山鳥先生のこと

矢尾鐵太郎（柏原町）

山鳥先生は柏原町南多田の私の家に長年下宿しておられた。先生の部屋は玄関に隣接した4畳半（昔は番屋とし

とになって先生の御他界の様子をお聞きすることになり、とても残念でした。私の生涯において先生から受けた学究の精神、そして人間としての交流のあり方や姿勢をご指導いただいたことに対して改めて御礼申し上げたい。合掌。

（追記）山ざる一七号に大野善三さんが「山鳥鋭男先生のこと」について、立派な作品を書いておられる。その御経歴や教師としての活動については、本誌三〇号で徳田八郎衛さんが執筆されている。そこで、私はかなり主観的な想い出話を書くことにした。

て使われた場所）であった。先生がどんな経緯で私の家に住まれることになったのか、いつ頃からのことなのか、最後に病氣（後日がんだつたと聞いた）で亡くなられた時が私の何歳の頃であったのか、今は遠い記憶の中に霞んでしまつて、まるで定かではない。（この

原稿を送つたら、編集子の徳田氏からそれは我々の大学4年目の終わり頃だと教えられた。ただ私の中学、高校から大学のほぼ終わりまで先生はそこに住んでおられたから、少なくともその期間は10年を下ることはない。

*

先生は下宿先の家人と親しく話したり、その子供たち（私たちのこと）と一緒に遊んだりする人ではなかったから、柏原高校入学前の私にとって先生はただの下宿人に過ぎず、先生について興味や関心を持つことも皆無であった。あの狭い、小さな窓が一つあるだけの、夏には蒸し風呂のようであったに違いない四畳半の部屋に先生は殆ど閉じこもるようになって、外出されることも殆どなかった。あの部屋にはテレビもラジオもなかった。酒を飲まれることもあまりなかったのではないかと思う。酔って赤い顔をした先生を見たことがないのでそう思うのだが…あの

部屋にあったのは、畳の上に積み上げられた多数の本だけだった。

*

私生活の部分に関する先生についての私の記憶は、毎晩お盆に乗せて夕飯を運ぶ母（それは当時としても粗末な食事であった筈だ）や、朝学校へ出かけられる前にそのお盆を返しに来られる先生や、お風呂をどうぞと母が部屋の外から声をかけるのに応じて、ゆかたの様なものを着て、下駄を履いてやって来られる先生の記憶に限られている。

希には先生の処に来客があることもあって、それらは中学や高校の先生（荻野先生という名前を覚えていた）であったり、2—3人の熱心な文学少女達であったりした。先生の家族の人が見えられたことについての記憶はない。

折角先生が我が家におられたのに、先生に個別に何かの教えを受けたということはありません。受験勉強中、何度か英語の質問をしに先生の部屋へ行っ

たことがある。そんな時先生は何時でも小さな座机で本を読んでおられた。質問への答えの他に先生が話をされることは大変少なかったから、私があこの部屋にいた時間は1回につき5分間位のものであったと思う。

柏原高校の1年4組で、木造の粗末な教室で始めて山鳥先生から国語の授業を受けた。この時期の先生の記憶が最も鮮明である。青白く生気に乏しい顔、仙人を思わせるひよろりとした体、膝の辺りが光った紺の背広をいつも着ていた先生、そんな先生が授業の中では突然のように自信に溢れ、情熱に充ち、信念から出た（と私には思われた）言葉を私たちに語られた。「鷗外先生は：—と先生が言われるのを私たちは度々聞いたが、そんな時には鷗外を貶すような生徒は許さんといった自信と

気迫に溢れていたように思う。

*

私たちはその時々になれほどの感銘

を受けたとは言えないが、良く分らないままに、この先生は何か深いもの、ある種の哲学のようなもの、人間の根源に根差すようなものを持っておられるのではないかと、何となく感じていた。「寒山拾得」のような、人の生き

方の話は、先生自身の生き方ともダブって、私たちに説得力を持っていたように思う。私は友人に対するような親しみは先生には感じなかったが、人生の問題で本当に困った時には山鳥先生に相談したいと思っていた。結局そんな機会は来ないままだったが：

あれから40年近くが経ち、多くのことが遠く朧になってしまったが、私の中の山鳥先生の記憶が何故か未だに結構鮮明であることに自分ながら驚いている。もし先生が今私たちの年齢でお元気でおられたら、是非お訪ねしてじっくりお話を伺いたいものだと思つた。

■会員が出版した本

自転車競技における ドーピング（薬物使用）

ポール・キメイジ著・大坪真子訳

『ラフ・ライド・アベレージ・レイサー
のツールドフランス』

未知谷出版社刊

テレビの普及はスポーツのビジネスとしての価値を高め、スポーツが利益追求の手段となり、過酷な条件のもとで過密なスケジュールが組まれる。野球、陸上競技、サッカーなどあらゆるスポーツの分野で「薬物（利用）スキヤンダル」が世間から激しい反発をまねき、重大な社会問題となつていく。

欧州自転車競技の世界ではドーピング疑惑で多くのスター選手が問題とされ、有名な自転車競技の檜舞台ツール・ド・フランスを欠場した。もともとドーピングは過酷な自転車

競技から始まったともいわれ、レースでの薬物使用は、この業界では「必要悪」だという認識がこれまで主催者や選手の間にあったといわれている（日経新聞1999・7・24付）。

著者ポール・キメイジは、19才でアイルランドの自転車競技のチャンピオン、23才で世界のベスト・アマチュア6位になり24才でプロの世界に入った。プロの檜舞台「ツール・ド・フランス」に3回挑戦したが、彼はトップ選手を支えて走る下積み生活を過ごし、過酷なレースを走るためにドーピングを体験した。プロ引退後にスポーツライターとなり、二流選手としての自分の青春の軌跡を描き、ドーピング問題を提起する『ラフ・ライド』（1990年5月）を刊行した。

ところで、当時の自転車競技団体の役員やトップ選手は、「薬に頼るのは、レースに出て生活費をひねり

出している二流の選手だけだ」と対応し、キメイジの著書は「仲間に対する裏切り」だとして無視しようとしたのである。それから8年後の1998年、ツール・ド・フランスは「薬物スキヤンダル」に揺れた。陸上競技、サッカーなどいずれのスポーツでも薬物使用が問題となつているが、自転車競技の長距離レースの過酷さはとくに薬物使用の必要性を生み出すことを本著は鋭く描き出している。

世界最高の競技であるツール・ド・フランスは、20日間にわたり、計4000キロに及ぶ長丁場を走り、世界のトップレイサーの2000名が参加する檜舞台である。多くの山岳区間の難所の走破が降雨の中でも強行され、選手が次々に脱落し、サポートとするはずのチームの衛兵すらついでに行けないという、苦行の続くスポーツ競技なのである。

1980年代からイタリアのプロ

自転車選手の間で始まった薬物使用は、次第にプロ選手の間には広がっていく。自転車が好きでプロになった選手が生き残るために、薬物の誘惑に負けていく。初めは体力回復の合法的な薬物、次に精神を昂揚させプレッシャーを除去してくれる非合法的な神経刺激剤、そして最後に命さえ失いかねない筋肉増強ステロイドへとエスカレートするのが通常だ。だがレースが盛り上がり、業界が盛り上がり、ハッピーな主催者側は充分な予防対策をとらないばかりか、暗に薬物摂取をそそのかすことになっていく。

本書『ラフ・ライド (Rough Ride)』は著者も自認するように、文章の中に事実の羅列が多く改訂の際には工夫したいと述べている。

しかしこの初版は反ってその文章や叙述がドーピングを生出す自転車競技の厳しい展開を生々しく描出しているともいえる。

(1)著者が選手として参加した「ツール・ド・フランス86と87」の20日間にわたる熱戦の展開、極限状況の選手の死闘、個々の性格の描写、名聲、嫉妬、順位を競う選手たちとそれをチームで支える二流選手たちによるサポートの血のにじむ労苦、(2)登場する1000名余の選手の国籍、民族性の差によるレースの進め方その経緯とランキングの上下移動、相互の友情と感情の対立、家族との関係や劣悪な宿泊施設、また、(3)さまざまな競技大会の開催地による運営や気候風土、観客たちの見物や応援、低開発国の住宅生活の描写など、自転車競技を取り巻く社会状況が描写されている。

日記風の事実の記述が著者の感覚や考え方を明らかにしており、役者の苦勞が報いられているようだ。

自転車競技選手のドーピングをとりあげた本書は、この問題の背景や展開過程を浮き彫りにしている。テ

レビの普及で国際的にビックビジネス化したスポーツが利益追求の手段となり、過酷なスケジュールが組まれ、選手が体力の限界を超えて酷使され、ドーピングに陥る過程は、すべてのスポーツに共通するものであり、現代のスポーツの病根を率直に描いた本書と、その翻訳作業を高く評価したい。

水上町成松出身の訳者大坪真子(柏原高・東京女子大卒)さんは、数年前アイルランド自転車ツアーに参加し、アイルランドと自転車に深い愛着をもち、本書の翻訳の仕事を楽しんでおられる。評者は、スポーツ法学研究の視点から本書の提起するドーピング問題に関心を深めることが出来たと思う。

〈坂本重雄〉



■郷里について書かれた本——

郷里の「山」がわかる

多田繁次著

『ひょうご低山遍歴

くなつかしの山やま』

神戸新聞総合出版センター刊

慶佐次盛一著

『兵庫丹波の山(上)』

ナカニシヤ出版刊

多田さんは明治三十九年生まれの旧春日部村(現春日町)出身で神戸在住である。兵庫県自然保護協会顧問、水ノ山の自然を守る会会長という肩書きからも想像されるように、大正九年に一四歳の頃から始めた山歩きは兵庫県全土に及び、以後「なつかしの」と略記する本書で取り上げる山々も氷上郡だけに限定されない。だが三一節の登山紀行を集めた「探訪編」の中で一五節が氷上郡での紀

行に宛てられる。出版は平成二年だが、すでに昭和四三年に「兵庫の山やま」、続いて「続・兵庫の山やま」を上梓している。

一方、慶佐次さんは昭和一〇年生まれで郷里は石垣島だが戦後は大阪に在住し大阪低山跋扈会を設立して会長となる。この「兵庫丹波の山

(上)」「は氷上郡の山、姉妹編」「同(下)」は多紀郡の山の登山紀行である。以後「丹波の山」と略記する本書は四六節の紀行文から成り平成三年に刊行された。ほかにも「一等三角点百名山」の共著者である。

親子ほど年齢の違うお二方だが、この二冊の本は実に良く似ている。どちらも昭和六〇年前後の登山紀行を収録し、山村の原風景に接することのできる氷上郡の低山を愛し、そして並の氷上郡出身者や居住者以上に地域の歴史、地勢、社寺仏閣、伝説に精通しているからだろう。強いて違いを挙げるならば、年長で地元

出身の多田さんが、少年時代の黒井城址登山や青年時代の三尾山登山の思い出、大正末期に陸軍測量本部が二万五千分の一の地図を発行した時の感激などを随所に書き記していることと、後段に懐旧編を設け、忘れられぬ山とスキーと人についての回想録に宛てていることである。

氷上郡とは生まれも育ちも縁のないはずの慶佐次さんの博識ぶりは我々には驚異、いや脅威でさえある。参考文献は、会員にはお馴染みの「謎の丹波路」「丹波史を探る」「丹波の城」から「新井村史」「稲継部落史」、さらには「蛇」「古代の鉄と神々」と幅広い。前段の郷土関連の文書に限っても、これだけ読んでいる人が我が会員にどれだけのいるだろうか。

〈徳田八郎衛〉

篠山市の合併を受けて

小田 晋 作（柏原町）

お隣の多紀郡四町が四月に合併して「篠山市」が発足しました。町が市になって、どういう成果があるのか。

今のところ住民にもはっきり目に見えるのは「議員の数が増えて人件費が上がるんやて」（丹波新聞の漫画「丹波学園」）くらいかも知れませんが、それはあくまで当面のことで、人件費を節約し、行政サービスの効率化が図られなければならないことは、言うまでもありません。

市町村合併の構想は全国あちこちでくすぶっている割に、実現にこぎつけた例はこのところ少ないとあって、県内はもとより、青森から熊本まで自治体や議会からの視察団が相次いで市は対応におおわらわ。もっとも、遠方から来てもなぜか市内に泊まっていくケースはなく、実入りは少ないとも聞きました。

ともあれ、篠山の合併が氷上郡の方でも大いに刺激になったのは事実です。四月の県会議員選挙で当選した新人の石川憲幸氏は、青年会議所時代に合併推進運動を手がけた経験から、前向きに取り組むことを表明していま

す。ひかみ青年会議所を中心とした六町合併連絡協議会（任意組織）は、法律に基づく「合併協議会」の設置を各町に請求するための署名活動を十月から始めることを決めました。六町の議長の間でも合併問題について積極的な声がかかり聞かれます。

今年一月には、郡内の消防行政などを共同で行っている氷上郡広域行政事務組合の現職の収入役が七千万円にのぼる公金を横領していたのが発覚するという事件が起き、組合ではずさんだった組織の改革に急いで取りかかるといふ、お粗末な事態を露呈しました。「合併の前段階として、分野ごとに進める広域行政を」という議論もあります、この例などはまさに広域行政の弱点を示したのと言えましょう。

広域行政ではゴミ処理や斎場など他の分野でも様々な取り組みがありますが、組織面のみならず、ゴミ焼却工場では小規模ではダイオキシン濃度の基準が達成できないという問題も出てきています。来春始まる介護保険で、町ごとに保険料やサービスがばらつくのも、よいこととは言えません。無論、合併が万能というわけではありませんが、住民は今こそこれらの問題に真剣に目を向けるべきでしょう。

とは言え、合併論議は個々の住民の間ではまだまだ盛



篠山市役所のプレート除幕式
(貝原知事＝右端も出席して 4月1日)

り上がっていないことも、否めません。最大の原因は、これまでの「右肩上がり」時代の余韻、惰性がそのまま残っていることで、「何も一緒にならなくても、何ら支障はないではないか」という気持ち強いことです。

しかし、ぼう大な借金を抱える国はもとより、兵庫県

も含めた都道府県もアップアップの状態。中央からは「大都市で徴収した税金を地方につき返まずに、大都市の基盤整備にもっと回すべきだ」という議論が、エコノミストを中心に「ごうごう」と起きています。

あらゆる意味で、補助金に頼っていれば何とかなる時代は去り、これからはそれぞれの自治体が「より少ない経費で効率的なサービス」に徹していかなければならない。国に対しても「税収配分を伴う権限の移譲、いわゆる「地方分権」を要求していかなければなりません」が、そのためにも基礎自治体の市町村が足腰をしっかりとする必要がある。住民もそれをバック・アップしなければなりません。

住民との接点となる議員が、そうした問題について、特定地域やグループの利害にとらわれるのではなく、いかに大きな目でとらえられるか、ということが、今後の合併なり地方分権の成否を左右するとも言えるかも知れません。

国は合併推進のため、特定期間の財政優遇措置など様々な特例法を用意していますが、それでも進まなければ、もっと強制的な措置に出てくる恐れもなくはありません。それを避けるためにも、やはり自主的な合併を進めていくべきだと思います。

(丹波新聞社社長主筆)

ふるさとトピックス — 『丹波新聞』から

柏原町・山南町など大被害

過去最高の集中豪雨襲う

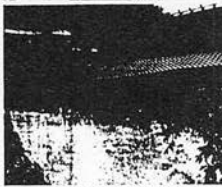
九月七日前一時の降り始めから八日午前一時までの雨量は三七三ミリと、

多田四十七世帯百七十八人、同町田路

で百九十四戸、水上町二十七戸、山南町二百八十三戸、春日町三十九戸、篠山市十五戸、土砂流入は一戸。

堤防決壊で大被害

過去最高の雨量373ミリ



一気に水かさ上昇

住民らなすすべなく



丹波新聞 1924年9月8日 山南 堤防決壊 大被害 多田四十七世帯百七十八人、同町田路で百九十四戸、水上町二十七戸、山南町二百八十三戸、春日町三十九戸、篠山市十五戸、土砂流入は一戸。

では二十三世帯八十九人が南多田公民館、田路公民館に避難した。また、浸水家屋などから三十二人を氷上郡消防署や消防団が救出。南多田では浸水して二階にいた女性を機動隊が救出した。

山南町岩屋で岩屋川が増水し、付近の民家二戸が損壊した。道路の冠水などの被害は、県道中柏原線の山南町玉巻と柏原町下小倉間が全面通行止めが続いているほか、国道175号の山南町井厚と草部間、県道奥野々氷上線の柏原町石戸などで全面・片側通行になっていたが復旧した。(平11・9・9付)

明治・大正の教科書展

氷上町立図書館に寄贈本

明治、大正時代に使われた小学校の国語の教科書が氷上町市辺の小森貢さんの提供により氷上町立図書館で展示され、当時の時代背景を知る貴重な資料としても話題を集めている。七月末まで。八月からはさらに大正から昭和

九月七日前一時の降り始めから八日午前一時までの雨量は三七三ミリと、春日町で死者三人を出した昭和五十八年九月二十八日の台風十号の二二五ミリを上回る記録となった。柏原土木事務所によると、昭和に入ってから最高の雨量という。

丹波県民局などのまとめによると、家屋被害は柏原町で床上浸水四十二戸、水上町二十六戸、山南町で二十八戸、床下浸水は柏原町

氷上郡南部に集中豪雨

三十二年（一九四七）頃までのものを展示する予定。

明治五年（一八七二）に定められた「学制」により、全国に小学校が設置されたが、最初は自由に選択できた教科書も、しだいに政府の許可が必要になり「官許教科書」から「文部省検定教科書」、さらに「国定教科書」へと内容が統一されていく。

今回展示されているのは、明治十年（一八七七）の官許教科書「小学日用文例」、明治二十一年（一八八八）の文部省検定教科書「初学第五読本」、大正七年（一九一八）の国定教科書「国語読本」など五冊。小学日用文例では、歴代天皇の名前や人の名字など漢字ばかりが並んでおり、同時に普段の生活のなかでよく使う言葉や歴史を学んでいた様子がうかがえる。

八月から展示される昭和二十年（一九四五）頃の教科書になると「ススメ ススメ ハイタイ ススメ」など軍国主義へと移り変わっていく様子が、

はつきりと見えるという。勝川浩幸館長は「GHQの指導で、教科書を墨で塗りつぶした記憶がある。歴史の足跡を知るうえでも貴重な資料」と話している。（平11・5・23付）

工場誘致計画で詐欺事件

青垣町東芦田地区で

青垣町の東芦田地区で、地元住民が水産会社の社長を名乗る男性に水産会社の工場誘致を持ちかけられ、建設計画が具体的に進んでいたが、二週間ほど前から男性との連絡が取れなくなり、困惑している。さらに、水産会社の工場に関連する商品の先物取り引きを男性から勧められた地元住民は、これまでに総額四千万円近くを支払ったという。地元住民は、「だまされた恐れが強く、告訴も含め対応策を検討している」と話している。

男性は四年ほど前から同地区内の喫茶店に現れるようになり、地域住民と

世間話などを通して親しくなっていたという。青垣に工場を建てたいという男性の話から、地元では「地域の活性化になる」「地元住民の働き場にもなれば」と工場誘致を推進。神戸にある水産会社にも数回にわたり、代表者が見学や計画説明を受けに行くなど具体的に話が進んでいた。（平11・8・26付）

農家の野菜直売所が盛んに

農家が地元で野菜を販売する農産物直売所の活動が盛んになっている。集落や有志グループで実施しているところが多いが、氷上郡ではそれぞれが小屋やテントなどで販売。篠山市では、旧町単位に整備されたメーンとなる施設を中心に展開されている。状況は違うが、「新鮮さ」と「安心感」が好評で、生産する人の生きがいづくりにも一役かっている様子。

（平11・7・18付）

ふるさとの祭り

その4

氷上町本郷の
「川裾祭」

祭が伝える本郷の栄光

徳田八郎衛（柏原町）

川上さんという姓はよくあるが川下さんや川裾さんなどは聞いたことがない、それに河口に接する村でもないのに何故川裾さんなのかと訝りながら、小学生の私たちは八月三日の夕方になると旧新井村最北端の母坪部落から一キロ少々北の本郷部落までゾロゾロ歩くのだった。途中の稲継では柏原川と本郷（佐治）川が合流して涼しい川風が吹き、夏の盛りだがふと暑さを忘れる。本郷と同じく旧生郷村の横田や旧

沼貫村稲畑から来た人波とここで合体し本郷川沿いに本郷へ向うと、旧沼貫村新郷や上流の成松町犬岡からも来た人々で狭い土手道は一杯である。

特に込むのは川中に設けられた御座所へ下っていく小径で、こここそ今夕のハイライト・ゾーンなのだが、単なる縁日気分の悪童には無縁の聖地？である。堤防上の「往復一車線」の道路両側に露店がギッシリ並び、カーバイトガスの匂いが立ち込めている。「露店の水は本郷川で汲んだ水や。飲食したらアカン。赤痢になるで」と無責任なデマも飛ぶ。この堤防から河原と反対側に在る集落へ下っていく路地ではスクリーンを張って映画を上映している。当時では最高の娯楽だ。だから手前に別の幕を張って直接覗けないようにした上で「このキャラメルを買ったから見られます」と来る。

少々高いのを承知で買って入場？すると、ナンダ、子供には退屈な成人

物である。それも昭和初期の無声映画！

「詐欺じゃ、ペテンじゃ」と憤慨する声や「一寸覗いてから決めるんやっただのう」とおのれの不覚を嘆く声飛び交うが、いままら退席するのも癪だから全員あくびしながら最後まで付合おう。よその村の子と知り合ったのだけが収穫だった。

この本郷は大きな集落で、現在でも八十戸、昭和初期には九十二戸もあったという。明治初期には横田、市辺、稲継とともに本郷村を構成し役場や学校も設置されていた。国領村国領、佐治村佐治と同様に村の中核となった部落である。明治四十年に石生村と合併して生郷村を設立した時、石生村は三四九戸で本郷村は三百戸であった。だから生郷尋常高等小学校の校歌も、第一節で「剣爾の山の朝ほらけ…」と石生を称えた後、第二節で「つきぬ流れや本郷川、くみて我らは伸びゆかん…」

ふるまとの祭り



水上町本郷川裾祭りの燈籠流し

と本郷を称えている。
 その本郷の誇りがこの川裾祭である
 が、水神信仰にまつわるこの祭は但馬、
 丹波、北播磨で広く行なわれ、この近
 隣でも七月二十八日は成松、二十九日
 は石生（最近は水分祭の登場で消滅）、

八月五日は北御油と連続していた。だ
 が、この本郷の川裾さんこそが元祖だ
 と聞かされて育ったと語るのは、生ま
 れ育った本郷の歴史を研究してきた荻
 野孝夫さんである。

本郷の歴史といえは舟運の歴史でも



ある。加古川から佐治川をさかのほ
 る高瀬舟の大半は本郷へ、一部が母坪へ
 「入港」したのだ。
 民俗学者が説くように、川裾祭の語
 源が川で身をそそぐ「川そそぎ」にあ
 るにせよ、本郷の場合は水害防止や川

の交通安全の祈願とも大きく結びついていると荻野さんは推察する。確かに道教の影響もあって、日本人の信仰は必ずといっていいほど御利益信仰と結びつく。舟運で栄えた本郷の人々が、純粹な「みそぎ」の精神だけで、この郡内一の川裾祭を継承してきたとは思えない。起源ははっきりしないが、本郷部落の御神酒錫（おみきすず）と御神灯に文政二年（一八二二年）と記されていることから、江戸時代後期に行われていたのは確実である。ひょっとすると起源は舟運が始った天正年間にまでさかのぼるのではないかと荻野さんは語る。

だが、敢えて舟運にだけ結び付けなくてもよいのではないか、水害防止の祈りの場として天正以前から祭はあったのではないかと私は思った。本郷の数百メートル上流に佐治川と葛野川との合流点があり、これらが合流した本

郷川と柏原川の合流点が数百メートル下流にある。これらの川が氾濫しても、近隣の稲継、母坪、横田、犬岡なら避難できる小山がある。ところが水田に囲まれた本郷には山も高台もない。住民が力を合わせて堤防を決壊から護るか、川の神に祈るだけだ。周辺の川の様をまとめて拝んでも不思議ではない。

御利益はこれだけではない。「裾」

という字の連想で、下の病、特に婦人病に効くと親しまれてきたという。悪童どもが御座所の方へ脚を運ばなかったのは正解だったのかもしれない。今は近隣からの人波もなく、お参りするの地域住民だけと聞く。だが昔からの八月三日にこだわり、かつての水上交通ターミナルの栄光を伝える川裾祭を護ってきた本郷の方々に深く敬意を表したい。



水上町稲継にて（徳田八郎衛撮影）

水島豊かなあの頃

上嶋恵二郎（氷上町）



八月三日は恒例の本郷の川裾まつりである。

夏休みには、水泳や蝉取り、魚

つりなど楽しい遊びはたくさんあるが、なんとといっても川裾まつりは一大イベントである。

当時、地元の小学生在が競って泳ぎに來た水量の豊富な本郷川の河川敷がメイン会場となる。青年団員の手により芝居小屋がしつらえられ、橋のたもとや土手には「川裾まつり」と染め抜いた幟が乱立して賑々しさを醸し出し、集った大勢の人たちを躍動した心にひきまられる。観客席には筵が一面に敷き詰められ、夕刻の開演を待たずに満員の盛況となる。

出し物はラジオでお馴染みの一流の役者による漫才落語や浪花節などであるが、青年団員による素人の寸劇も異常な人気を呼んでいた。何しろ役者の身元が解っているだけに、上手下手、美しさなどを評し、この上演で雰囲気は最高潮に達するのである。

都会に出ている人も、お盆の里帰りの日程を川裾まつりに合わせるほどである。私の父などは、いつもラジオで浪花節を聞くのを唯一の楽しみにしていただけに、生の声が聞けるとあって、その喜びもひとしおだったろうと思う。桃などの夏果物をはじめ、駄菓子などの屋台が所狭しと出店している。屋台の照明に今は電気を使うが、当時はカーバイトのガス火で明かりを取り、品々を照らしていた。そのカーバイトガスの独特な匂いが今も鼻をついて離れない。実に懐かしい匂いではある。

我が家では、何拾銭かの小遣いを握り締め、弟妹揃って浴衣姿で出かけるのである。何時もはなかなか呉れない小遣いも、今日に限っては親の方から渡してくれるので嬉しくてたまらない。その小遣いを思い思いに使って楽しむのである。ある時は元氣あまって近所よりきた若童と、いさかいを起こすこともしばしばで、向こう見ずな若さ？ゆえの、暴走だが愉快な思い出の一つではある。

懐かしい思い出はたくさんあるけれど、遠い昔のことなので十分に思い出せない。私の人生の一ページとして、色濃く心に刻まれた川裾まつり、今の文を書きながら望郷の念に駆られる。今年は今久しぶりに帰省しようかと思っている。

雨を降らせた蟻の話

「丹波むかしばなし」より

今から五百年も昔の芦田の里のできごとです。この年の田植は十分水があったので、無事にすみましたが、それから後は、雨が少しも降りませんでした。夏になると、日照りがますます強くなって、植えた稲ももう少して枯れるところでした。村人たちは井戸から汲み上げた水を、遠い田へ運び、ひしゃくで一株ずつ水をかけるといふ有様でした。

村人たちは、集まって、どうすれば雨を降らせることができるのか相談しました。人の力ではもうどうすることもできません。このうえ、雨が降らなければお米も取れず、食物がなくなつて死んでしまいます。

「神さまにお願いするしかない」と皆で定め、近くにあるお宮さんへ、村人が全員集まりました。神さまの前で「雨が降りますように」と祈っている人々の足もとに、ひとすじの黒いものが続いています。よく見ると蟻が列を作っています。その蟻の列は、お宮さんの石段を下つていきます。「どこへ行くのかな」と不思議に思った村人は、蟻の行先をたどって行きました。蟻の列は、石段を下りて道を通り、山をまわつて、どんどん山奥へ続いています。ようやく蟻の列は、小さな水たまりに行きつきました。よく見ると、この池からは少しずつですが水が湧

ふるさとの民話と伝説

いています。「この池の水を田へひいたら稲が枯れずにすむ」と思いましたが、僅かの水ですから、すぐ地面に吸い込まれます。

「もっと水が出るように、祈ってみよう」村人たちは池のまわりにろうそくを立て、火を灯して、いっしんに祈りました。すると空がにわか曇ってきました。ろうそくのとけた「ろう」が池の中に流れこんだかと思うと「白い龍」となって、天高く昇って行きました。この白い龍が黒雲の中へ、入ったかと思うと強いなびかりがしました。とたんに大粒の雨が激しく降りはじめました。

この雨は三日三晩降り続きました。お陰で田畑は潤い、稲はどんどん大きくなって、その年はお米がたくさん取れました。けれども池まで案内した蟻は、大水で流され、溺れて全部、死んでしまいました。村人たちは、この蟻達を哀れんで、死んだ蟻を集め、「蟻塚」を池の近くに作りました。またお宮さんには、石に「蟻の宮」を彫って建てました。このお宮さんは今も「蟻の宮」として村人に信心されています。今でもこのお宮さんの「砂」を頂き、蟻の道にまいておくと、蟻たちはこの砂の場所をさけて通るそうです。蟻たちは村人の信心の心を受けとめて、悪い事をしないそうです。 (財)丹波の森協会発行「丹波むかしばなし」より(木呂子転記)

(注)この物語で犠牲になった蟻の正体は秦氏の支族で土木、養蚕に優れた阿利氏のことです。神社の下を流れる二キロメートルに及ぶ井堰用水路の工事中に、事故や病気で亡くなった阿利氏の技術者を蟻に仮託して祀ったものです。水利事業が当時大事業だったことを物語っています。

展 覧 会

●丹波新聞社屋竣工記念
常岡幹彦展

丹波新聞社の社屋竣工を記念した常岡幹彦展が、今年2月16日から18日の3日間、竣工なった新社屋3階ホールで開催された。「ふる里の山々に包まれて」と題された同展は、80号・50号



小田社長、同夫人と共に常岡画伯（中央）

の大作のほか小品・色紙など34点が出品され、丹波の山々や田園、田舎家などを描いた作品が会場を満たし、古き良き丹波への郷愁に誘われた。同画伯は「柏原に疎開していた戦争中、毎日たきぎ取りに山へ入って霧の立ちこめる峰々を眺め、苔むした木の肌にさわりながら、これがふる里の色かと感じていた」と、その原点を語っている。

前年秋にも、父の故・文亀（元東京美術学校教授）生誕百年を記念した親子展「二代をつなぐ美の系譜」を水上町立植野記念美術館で開催して好評を博した。

〈池田〉

常岡幹彦展 ふる里の山々に包まれて

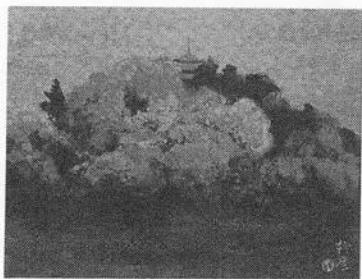
2月16日（火）～18日（木） 本社3階ホール

自然の奥にある「魂」
画伯の原点を再現

丹波新聞社屋竣工を記念して、常岡幹彦画伯の作品展を開催する。画伯は、戦時中、疎開先の柏原で、自然の奥にある「魂」を表現した。この展覧会では、画伯の原点を再現し、その芸術的価値を伝える。展覧会は、2月16日から18日、本社3階ホールで開催される。展覧時間は、午前10時から午後5時。入場料は無料。お問い合わせは、本社庶務課（電話：078-222-1111）まで。

丹波新聞社屋竣工を記念して、常岡幹彦画伯の作品展を開催する。画伯は、戦時中、疎開先の柏原で、自然の奥にある「魂」を表現した。この展覧会では、画伯の原点を再現し、その芸術的価値を伝える。展覧会は、2月16日から18日、本社3階ホールで開催される。展覧時間は、午前10時から午後5時。入場料は無料。お問い合わせは、本社庶務課（電話：078-222-1111）まで。

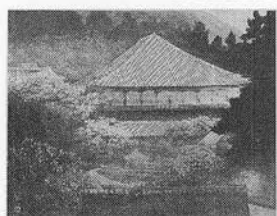
本社新社屋竣工記念



八幡山の秋（1982年）



二月堂の月（1983年）

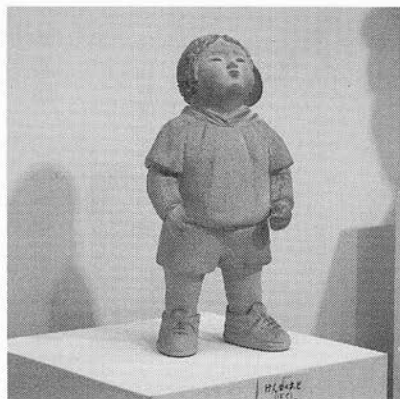


（丹波新聞・平成11年1月1日付）

●陶彫会第46回展に

可部美智子さん出品

陶光会、一陽会、新槐樹社、「二」紀会、日展等約10団体の有志による陶彫の会。可部さんは個展開催の折には陶板、皿、壺なども出品して力強さを感じる作品もあるが、人物をあつかう陶彫では丸みのあるふくよかな表現の作品が多く、愛情をもって見つめる作者の眼をいつも感じる。



今回の出品作「おるすばん」は、あ

どけない赤ちゃんを抱きあやして留守番をしている姉の表情が静かで愛らしい。「けんかのあと・ぼく」は気ま

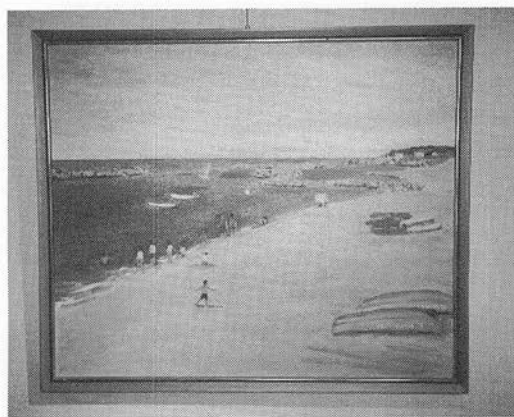
ざと少しすねた表情が身体全体から感じられて、誰しも子供の頃を思い出すような作品。他に「一休さん」など。

(’99年6月14日～20日、銀座コリドー街、アートホール)

●運輸・海保絵画クラブ作品展
に久保良雄氏出品

昨年の作品「日本海」は冬であったが、今回は明るい海浜風景「浜辺にて」20号の出品。前景の浜は黄土色を含んだ中間色でまとめたが、微妙な色の変化によって単調にならず、むしろ海と空の寒色の対比によって絵をひき立たせた。海浜に子供たちの遊ぶ姿が、色調の明るさと共に楽しい夏のひとときを感じさせる。

ただ、画面右下のブルーのボートが



少し気になる。砂浜手前に一人離れて立つ子供を、少し右に移せば右下にサインを入れておさまるのではないか。その方がより自然でのびのびとした大きな空間を生んだように思う。

(’98年11月30日～12月4日、京橋、ギャラリートクボタ)

●青垣二〇〇一年日本画展

早いもので12回展を迎えた。初期の頃には入落ポーターラインすれすれの作品に、何を描こうとしているのか無意味に感じるものが何点か目についたが、最近はやや平均化してきた。大賞になった広森守氏の「記憶」や、優秀賞、阿部美果氏の「郊里」など、確かにレヴェルは上がってきている。しかし、殆どの作品が同じスタンスで、類型を感じるとも、若々しい鼓動、主調がほしーと思った。

油絵と日本画の問題（これは今の日本画全体が抱えている問題でもあるのだが）を含めて、日本画がどこへ歩いてゆくのか——難しいことだが、若い人の高度な深い思索があってほしいと思う。

（'98年11月30日～12月5日、銀座ギャラリー・センタービル6F、洋協アートホール）
 〈以上、常岡〉

同好会

●氷上郷友会・ゴルフ同好会の ご案内

ゴルフ好きの面々で年に4回、会員のお骨折りで個人ではなかなか行けない名門コース等をメインに例会を実施しており、みなさん同郷ということも手伝って、毎回和気あいあい楽しい会

（成績表）

第73回 平成10年12月3日 於・習志野CC

氏名	グロス	ネット	順位
藤田 徹	99	79	優勝
松下 貞子	110	80	2位
古沢 美恵	104	81	3位
岡 吉明	112	96	BB

第74回 平成11年3月4日 於・鎌ヶ谷CC

氏名	グロス	ネット	順位
橋爪 忠	98	81	優勝
塚口 智	88	86	2位
水舟 隆昌	95	88	3位
宮本 隆行	112	103	BB

第75回 平成11年6月10日 於・藤ヶ谷CC

氏名	グロス	ネット	順位
古沢 美恵	93	72	優勝
足立 謙悟	95	82	2位
渡辺 隆男	99	84	3位
松下 貞子	118	94	BB

第76回 平成11年9月2日 於・大箱根CC

氏名	グロス	ネット	順位
古沢 美恵	94	79	優勝
藤田 徹	94	80	2位
松下 貞子	104	80	3位
宮本 隆行	104	95	BB

を運営しております。
 あなたも会員の資格はすでにお持ちです、出席できる例会だけでも参加されませんか。とにかく楽しい会です。
 75回大会には、はるばる丹波よりの参加者もあり、懐かしい話に話題沸騰しております。

参加希望の方は幹事の足立謙悟氏
 (ミワ電気工事・☎045・772・1261)まで。
 〈岡吉明〉

同窓会

'98 柏陵同窓会東京支部総会

平成11年5月15日、九段会館において開催された。同日は阪神支部総会と重なったため、新任の渡辺秀樹校長の出席はなかったが、植田憲雄会長の臨席を得て60名の同窓生が集った。'68卒業の交換留学生グレイ・トーマス氏も加わって、国際色豊かな集まりとなった。トーマス氏は国際弁護士として東京で活躍中である。

〈坂上〉

● 柏原高校好楽会

「橋本先生を囲む会」

柏原高校のコーラス部には現役と卒業生で組織する「好楽会」が半世紀のながきにわたって続いております。

その中でも戦後、満足な楽器など何ひとつない時期に第一回生（昭和24年



卒）から数年間、音楽やコーラスの楽しさを教えてくださった橋本喬雄先生を囲む会が澤潟徹郎君など第六回生の主催で5月5日大阪のホテル阪急インターナショナルで開催されました。

第一回生から八回生（昭和31年卒）まで関東からも5名が参加して総勢34





名で楽しい一日を過ごしました。

参加者全員が還暦も過ぎ約50年振りに再会した方々も多く、それでも昔取った杵柄かで最後は橋本先生の指揮で数曲コーラスを歌い、まるで半世紀前にタイムスリップした夢のような一日を楽しみました。

来年8月はこの好楽会も五十周年を迎えます、郷友会にも多くの「好楽会会員」の方がいらっしゃいます、来年の「好楽会」にはぜひ大勢で参加しませんか。

〈飯田光雄・記〉

●柏高第九期生会（柏九会）で恒例の高野山参り

柏原高校第九期生会（柏九会）は7月31日、今や恒例となった高野山参りを行い、東京や京阪神、そして郷里から38名が参加しました。これも恒例となったガイド役は真言宗僧侶の堀井隆水前柏高校長。先立った同期生の霊を慰めた後、紀州の殿様や昭和天皇がお

泊りになった龍神温泉「上御殿」で懇親を深めました。還暦を過ぎて初めて参加した人も、ここで45年前の高校入学時の心に戻ったとか。翌日は熊野古道中辺路を散策し「南紀の森は丹波の森よりも年期が入つとるのう」と感嘆した次第。

〈徳田八郎衛・記〉

〈訃報〉

平成十一年八月三十一日までに事務局に届いた訃報です。つつしんでご冥福をお祈り申し上げます。

藤原あつみ殿 平成九年十二月二十日

足立 護殿（春日町黒井）平成五年

足立 嘉也殿 平成十一年一月一日

安藤 繁夫殿 平成九年

谷垣 博殿 平成五年七月

塚口 生郷殿 平成十年一月二十四日

畑 秀夫殿 平成十年一月二十二日

本庄 久雄殿

宮垣 仁郎殿 平成十年二月

山蔭あや子殿 平成十年十一月

猿

友

会

井田悦子
喜田綾子
長尾貴美代

大石佐代子
小糸イキ
安原三智子

小田明子
笹倉郁子
塩見みつえ

可部美智子
篠原よね子
渡邊貴美子

岸本昌子
千葉淳子



建築材料販売工事
建設大臣許可第1834号

中央建材工業株式会社

取締役副社長 荻野 武
(市島町出身)

- 本 社 名古屋市千種区高見 1-6-1
電話 052 (761) 6181 (代表)
- 東京支店 東京都大田区西蒲田 8丁目 9番10号
電話 03 (3730) 1281 (代表)
- 大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1-8-15
電話 06 (443) 6665
- 豊田営業所 愛知県西加茂郡三好町大字三始西田 3-4
電話 05613 (4) 3121
- 仙台出張所 仙台市青葉区高松 2-11-15
電話 022 (273) 5724
- 札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7-12
電話 011 (271) 3961
- 新潟出張所 新潟市米山 5-1-25
電話 0252 (245) 1705
- 松本出張所 松本市野溝木工 1-6-58
電話 0263 (25) 0351
- 広島出張所 広島市西区中広町 1-4-16
電話 082 (291) 3780

株式会社 **三 葉 水 道**

代表取締役 **橋 爪 忠**

(氷上町黒田出身)

〒276-0034 千葉県八千代市八千代台西7-5-29

電 話 0474-84-7121 FAX 0474-82-9626

エクステリア専門商社

株式会社 **トコナメエプコス**

代表取締役 **松 下 文 雄** (柏原町)

常務取締役 **広 瀬 寿 和** (山南町)

〒166-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル

TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-5
電話 03-3300-6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第 2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第 5191号

若 森 技 術 士 事 務 所

所 長 若 森 敏 郎

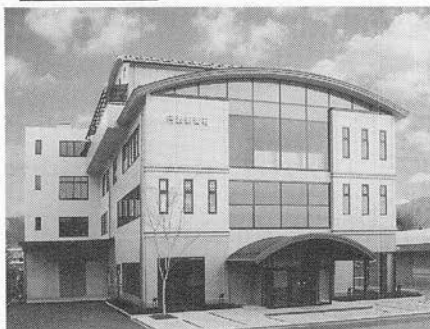
〒302-0023 茨城県取手市白山 5-4-13
TEL・FAX 0297-72-0907

◆本誌発行にご協力有難うございました

1924年創刊 週2回(日・木)発行
1ヵ月1,220円(郵送料200円)

全国各地、海外で活躍する丹波出身者の近況を
紹介する **丹波人NOW** が好評です。

完成した新社屋



丹波新聞社

〒669-3309 兵庫県氷上郡柏原町柏原201
Tel 0795(72)0530 Fax 0795(72)1956
E-mail tamba-ns@mxa.nkansai.ne.jp



代表取締役社長 小田晋作

関東とふるさとをつなぐ「グローバル」な紙面

倉庫・運輸・化工の総合物流業

平成10年度事業として大阪支店を、春に開設しました。

丹波路への物流を目指して!!

三協運輸株式会社

取締役社長 岸本 勲

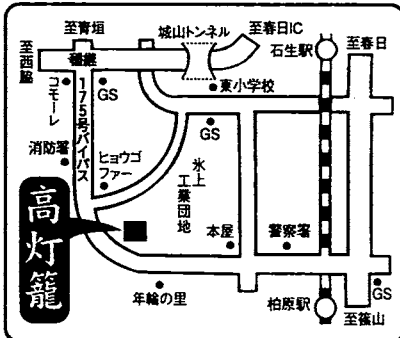
(氷上町出身)

本社 〒121-0064 東京都足立区保木間1-1-3
TEL 03(3860)8112 FAX 03(3860)1631
大阪支店 〒578-0911 大阪府東大阪市中新開2-5-26-201
TEL 0729(64)6499 FAX 0729(64)6499
名古屋事業所 〒455-0021 愛知県名古屋市港区木場1-4
TEL 052(691)8574 FAX 052(691)8447
埼玉支店 〒363-0008 埼玉県桶川市大字坂田字畑谷1500-1
TEL 048(728)9380 FAX 048(728)9381
倉庫 東京・大阪・名古屋・埼玉・九州

日本の真ん中から出た
柏原天然温泉

たかとうろう
高灯籠

TEL **0795-73-1126**



貴船自動車道帯BICより城山トンネルを経て信号(欄柵)左折、約1km

入浴料：大人550円(中学生以上)
子供250円(小学生)
幼児100円

営業時間：朝9時～深夜3時
定休日：毎月第3木曜日



60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌 [さすが&されど] 好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です
／日々の暮らしから世直しまで知恵と体験で情報発信
します／年間購読料 3,500円(税・送料込み) 下記へ。

近刊■古稀記念に贈る▶**昭和5年生まれ**

■還暦記念に贈る▶**昭和15年生まれ**

上記2冊ともA5判 224頁／美装本・表紙布クロス・ケース入り／
定価 3,500円(送料・税込み)／直接下記へ・代金後払い

既刊■同時代シリーズ [昭和4年／昭和11年／昭和12年／昭和13年／
昭和14生まれ] ／仕様は上記と同じ。

株式会社 **ホンゴ出版**

代表取締役 池田 忍

東京都中央区明石町 2-16-206
〒104-0044 ☎03(3248)6625
郵便振替 00130-5-144071

◆本誌発行にご協力有難うございました

製造品目

船舶・艦艇・陸上用・自動制御盤
始動器・分電盤等

日本工業規格表示許可工場



桑畑電機株式会社

代表取締役社長 桑畑芳郎

(柏中48回卒)

大阪市大正区泉尾2丁目22-3

TEL 06-552-0951 代表 FAX 06-552-0955

パソコン開発・データ入力

有限会社 ケーエスシステムサポート

代表取締役 藤田 徹

〒134-0083 東京都江戸川区中葛西5-41-8

金栄ビル2・3F

TEL 03-3675-4351

東京都ユニバーサルスポーツ協会副会長
府中市教育委員会認定市民スポーツ指導員
東京都渋谷区日中友好協会理事
E M ネット 埼京理事

足立和巳

〒183-0051 東京都府中市柴町一―一五―二七
TEL・FAX ○四二―三六四―七三二七

足立かをる

足立勲平

〒251-0031 藤沢市鶴沼藤ヶ谷一―七―四
電話 ○四六六―二二―六四六一

ミワ電気工事株式会社

代表取締役 足立謙悟

〒235-0033 横浜市磯子区杉田五―二二―九
電話 ○四五―七七―二二六―一
FAX ○四五―七七―二二六―四

足立静雄

株式会社 トレンタ

足立真一

〒211-0005 川崎市中原区新丸子町七〇―一
電話 ○四四―七二―六三三七―一
自宅電話 ○四四―八五四―六三四〇

足立誠一

〒248-0031 鎌倉市鎌倉山四一八一二五
電話〇四六七-三一-三六〇〇

日本損害保険協会特級(二般)資格 第一三五六六号
飯田保険事務所

飯田光雄

〒285-0045 千葉県佐倉市白銀四一十四一五
電話〇四三一四八五-〇五〇三
FAX 〇四三一四八五-〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社 明日香園

代表取締役 池畑豪士郎

本社 東京都豊島区南池袋二一二六一五
電話 〇三-三九八〇-四七三二
直販店 西武百貨店池袋本店B1
電話 〇三-五九五二-一五〇七六(直通)

生田清弘

東京都世田谷区成城一-七-七
電話 〇三-三四一五-一八九三

井本義一

上田 脩

〒112-0015 東京都文京区目白台二一九-一八一
四〇三

大野善三

自宅 〒228-0821

相模原市相模台七-二五-八
電話 〇四二-七四六-八七九〇

有限会社 PCC大洋

岡吉明

〒351-0014

朝霞市膝折町三-七-五
TEL 〇四八-四六〇-一六〇一
FAX 〇四八-四六〇-二三九七

小田富士夫

梶原やす子

片岡クミ子

株式会社 アイ・ケイ・アイ

代表取締役 岸田勇

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町二-三四-一

SEED日本橋3F

電話 〇三-三二四九-五二六二

久保豊

株式会社 アン
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目一三
電話 〇三-三四七八-七四一一(代)

久保春雄

〒300-0031 土浦市東崎町十三丁目二六〇四
電話 〇二九八-二二-二九七八

木呂子 惠美子

〒204-0012 東京都清瀬市中清戸二丁目七五〇-一八
電話 〇四-二四一九-一三〇三三

坂上豊

坂上勝朗

栗田功

坂 本 重 雄

〒193-0816
東京都八王子市大楽寺町三八七-二〇
電話 〇四二六-二六-七〇八六

佐 々 木 盛 雄

〒161-0035
東京都新宿区中井二-十一-十八

合唱指揮者

笹 倉 強

〒352-0014
新座市栄四-五-二二五
TEL・FAX 〇四八-四七七-五六四〇

高 見 嘉 都 司

〒173-0025
東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話 〇三-三九五六-〇六〇〇

高 見 秀 史

会社TEL 〇三-五三三-一〇〇一
自宅TEL 〇四七-四三九-一六九一

(株)フジサンケイリビングサービス
セントラル・インパックス(株) 専務取締役
代表取締役

大菱印刷有限公司

田 中 寛

〒110-0016
東京都台東区台東一-二七-五
大塚ビル
電話 〇三-三八三-一五九五

鶴
田
宏

常
岡
幹
彦

千
種
倫
幸

波
多
洋
三

〒112-0003
東京都文京区春日二-17-2
電話 〇三-三八二-二八六〇

日本舞踊
西崎
根岸
妙祥
端唄

〒224-0027
横浜市都筑区大圃町五〇〇-18
電話 〇四五-1591-六六五五

田
英
夫

〒100-0014
東京都千代田区永田町二-1-11
参議院議員会館229号室
電話 〇三-三五八一-三二二-内線五三九

青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑

(都営八王子霊園隣り
第二期墓地分譲案内中)

住職 堀井隆川

〒193-0826

東京都八王子市元八王子町三-三三九七
電話 ○四二六-六三一八四〇三

瑞豊産業株式会社

代表取締役
長 水船隆昌

〒102-0076

東京都千代田区五番町六
グレイス五番ビル7F
電話 ○三-三三二二-一七三五

東京都行政書士会理事・東京都行政書士会八王子支部理事
小口・宮野合同事務所 所長

行政書士 宮野近

事務所 〒192-0063

八王子市元横山町二-一八一三宮野ビル
電話・FAX ○四二六-二八一三三五
八王子市打越町二-二二二三
自宅 〒192-0911
電話 ○四二六-三五一四三八五

ウエディングドレス専門創作
株式会社 シヤルム商会

常務取締役
東京店店長

村上昇

東京店 〒164-0013

本社 〒604-0885

東京都中野区弥生三-一五-三
電話 ○三-三三七四-〇二一五(代)
京都市中京区問之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話 ○七五-二二二二-〇二一五(代)

村上久夫

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東三-四-十二
電話 ○三-三三三二-一七二三四

山口和久

恵理子

藤吉郎秀吉

寧々・愛々・茶々

〒196-0031

東京都昭島市福島町二-一〇-二七
電話 ○四二-一五四四-八八六一

PHP文化フォーラム 増生の宿

代表 吉 住 自由造

〒 216 | 0033

川崎市宮前区宮崎五―五―三五
電話〇四四―八六六―三六一―

義 積 保

〒 277 | 0863

柏市豊四季七〇二―一―
電話〇四七―一七四―〇三二五

渡 邊 隆 男

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみ呼びおこします。そんな仲間のひろがり、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千元、半頁広告一万五千元、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願いします。

▼年会費の二〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、『丹波のきずな』の強さを思います。

(山ざる編集部)

集	編
記	後

★「孤高の碩学」山鳥先生
に關しては、私個人の想い
出も諸先輩からお聞きした
エピソードも記しきれない

ほど沢山あります。パートⅡさえ書けそ
うです。それにつけても、あの立派な先
生が五十六歳で亡くなったのが残念でな
りません。先生に寄稿して頂いた生徒会
誌を転勤の度に「捨てようか」と迷いな
がら持ち歩きましたが、今は私の宝物で
す。他人から見れば汚いポロポロの紙に
すぎませんが。(徳田)

★今年の夏は、格別に暑かったのではな
いでしょうか。そのためか私も少しスト
レスが溜まっていたので、九月のはじめ
に一泊の同窓会に参加して、素晴らしい
夜景や日の出を見ることが出来ました。
また懐かしい方々との語らいに気持が和
み、ああ来てよかったと清々しい気分
になりました。一九九九年もあとわずか
です。この年の締めくくりに九段会館でお
もしろい丹波弁や幼い頃の思い出話に花

を咲かせてみてはいかがでしょうか。お
待ちしております。(片岡)

★庭の片隅に、咲き出した萩を見つけ、
嬉しく籠に生けました。丹波はどのよう
な景色でしょうか。私の手元に昭和47年
3号の「山ざる」があるので、27年間の
読者です。郷友会での上山顕さんをはじ
め、大きな心の財産になっております。
『山ざる』誌をご覧になり郷友会に出席
しようという方が、若い方の中にも増え
たら良いなと思います。(木呂子)

★今年は中学校の学年同窓会があり、高
校のクラス会があった年なので、多くの
同級生に『山ざる』への寄稿と関東水
郷友会総会への参加を呼びかけました。
そして、新たに7名を会員名簿に加えて
もらいました。近い将来に効果が出てく
ればと思っています。(本城)

★戦争やら地震やらが、世界のあちこち
で頻々として起き、それがリアルタイム
で伝わってきます。昔なら、世界はおろ
か国内の出来事にも無関心でいられたの

ですが、現代はそうはさせてくれない。
まこと「のどかな」心象風景は思い出の
中の故郷にしかなくなってきました。そ
の故郷も、今では例のケータイというヤ
ツで銀座通りを歩きながら「どないしょっ
てん？」と丹波弁で会話が出来ます。本
誌の「ふるさと随想」への投稿数が少な
くなってきたのも、「思い出」が希薄に
なりつつあるせいでしょうか。(池田)

山ざる 第30号

平成十二年十一月一日発行

【委員】 足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子
足立和巳 大野善三 小田富士夫
片岡クミ子 坂上勝朗 常岡幹彦
【編集】 鶴田ゆき子 徳田八郎衛 本城英明
宮野 近 渡邊隆男

発行者 関東水郷友会会長 渡邊 隆男

〒101-0051 東京都千代田区神田小川町一丁目二
DMSビル内・関東水郷友会・事務局

電話 〇三(三三九三)二九六一

振替 〇〇一〇一三二一三三三〇

製 作 株式会社ニ玄社

編集協力 株式会社ホンゴ出版

おもわず 新しい

NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東京支店 111-0052 東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッパイ株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千葉工場 270-0202 千葉県東葛飾郡関宿町台町2192 TEL 0471-96-1721

ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321

故宮博物院名蹟の完全複製

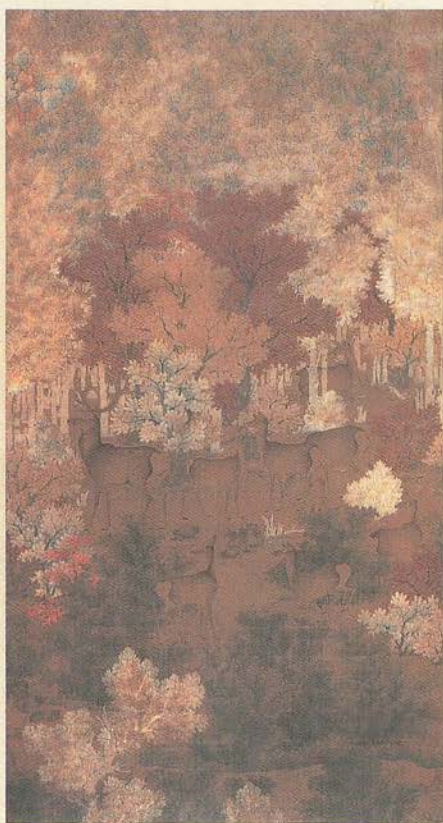
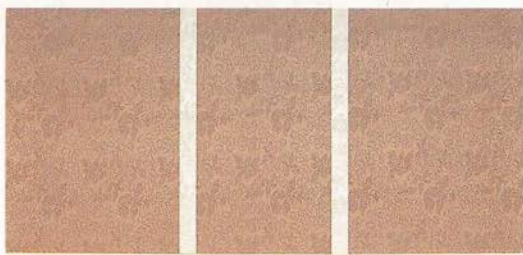
当社は台北の故宮博物院と合作、中国歴代の名筆名画四百余点を厳選、二十余年の歳月をかけ、先進技術の粋を駆使し、原蹟と寸分たがわぬ完全複製を完成、美術界の画期的大事業と世界の称賛を集めています。床の間に居間に、贈答に、悠久の芸術境をお楽しみください。詳細カタログ進呈。氷上郷友会々員には卸価格で提供。下記社長宛に一報下さい。



二玄社

社長 渡邊隆男

東京都千代田区神田
神保町2-2 / 〒101-8419
電話03-5210-4733
Fax. 03-5210-4723



P2 五代 丹楓呦鹿図

秋色深まりゆく森に憩う一群の鹿を描く。丹楓は紅葉、呦鹿は鹿の鳴く声。絹本に描かれた中国・五代（九〇七〜九五五年）時代、風景画の傑作。中国絵画史上でも極めて重要な位置にある名品。鉤勒填彩法で描かれた樹木に没骨法で描かれた鹿が優美に調和し、樹々の繁るさまがひとときを深みをおびて、鹿の鳴き声が聞こえるばかりの風情をかもし出す。

絹本・墨画設色 桐箱入
画面寸法=118×65cm
軸装寸法=212×76cm
(頒価 税込 75,600円)
郷友会特別価 50,000円